

# 服部南郭年譜考証

日 野 龍 夫

はじめに

服部南郭の伝記研究として、享保三年柳沢家致仕前後までの分を、「文人の成立——服部南郭の前半生——」と題して拙著『徂徠学派儒学から文学へ』（筑摩書房刊、昭和五十年一月）に収録した。今ここに享保四年以後の分を年譜として発表する。

一部分、未完に終わった旧稿「服部南郭伝攻（下）」（『女子大文学』第二五号）と重複する記述がある。

『南郭先生文集』を引く場合、初編巻九を「初・九」などと編巻のみを略記した。既刊の拙著を挙げる場合は次の記号を用いた。

I——前記『徂徠学派儒学から文学へ』

II——『江戸人とユートピア』（朝日選書78。朝日新聞社刊、昭和五十二年一月）

III——日本思想大系『徂徠学派』（岩波書店刊、昭和四十七年四月）

享保四年 三十七歳

○四月十三日、安藤東野が三十七歳で歿した。東野は前年春南郭が柳沢家を致仕したのと時を同じくして、柳沢家からの扶持を打切られた。その折南郭が同病相憐んで東野に与えた「与東壁」(初・九)は、短文ながら致仕に際しての南郭の心境を伝えて余すところがない。I二一〇頁およびII二〇二頁参照。今東野を失って、南郭に五律「哭東壁」十首(初・三)「東野先生碣」(初・八)「祭東壁」文(同上)がある。

「哭東壁」十首」から其二を引く。

山阿已送君

長夜就孤墳

芝草悲先萎

香蘭悟自焚

拊心行哭野

濺淚坐看雲

逝矣滕東壁

死生從此分

東野、名は煥凶、字は東壁。下野那須の人。始め中野搗謙に学んだが、荻生徂徠がみずからの弟子に貰うけたという。山県周南とともに最も早い徂徠の門人である。搗謙門の太宰春台が徂徠門に移ったのは、東野の勧誘による。

徂徠は中道で斃れた弟子の才を惜しみ、遺稿集の編纂を企てた。本多猶蘭が出版を引受けたが、実際に『東野遺稿』出版が完了したのは、歿後三十一年目の寛延二年であった。遅延の経緯については人見伝蔵氏「東野遺稿刊行の事情」(上)(下)、『斯文』第二二輯第五・七号)に詳しい。猶蘭が公務多忙で遅延したのを、もとの同門で遺稿集出版に責任を感じていた春台が例の律義で厳しく詰問し、両者の感情がこじれてさらに遅延を重ねたものであった。

○秋、平野金華が朝鮮信使と応接するため三河刈谷へ赴いた。翌年春江戸に戻る。後掲する南郭の送序のほか、徂徠に「贈子利之三河」掌記序(『徂徠集』一〇)、春台に「送平野子利往刈谷」序(『紫芝園前稿』三)がある。また

この時護園からは、春台・秋元澹園・石川大凡・岡井嘯洲等が江戸で韓使と詩文を唱酬した。

金華、名は玄中、字は子和。陸奥の人。この年三十二歳。奔放奇矯の人柄をもつて聞える。正徳享保の交に刈谷藩に仕え、いつのころか致仕して、享保十年ごろ水戸家の支藩である磐城守山藩に仕えた。南郭が徂徠の門で最も親しく交わったのは金華である。兩人の親密な交友ぶりは、金華の「送玄海上人序」〔『金華稿刪』四〕に伝えられる（I 三一頁参照）が、南郭の「報源京国」〔二・一〇、享保八年冬〕にこうも述べる。

不佞の称する所、平生（平は平野の修姓）之を信ず。平生の称する所、不佞之を信ず。

金華の三河行を送る南郭の「送子和序」〔初・六〕にいう、

（人が）毀るに奇癖を以てすれば、子和益々敢へて狂を為して自ら快しとす。然れども滑稽にして窮せず、人々之を屈すること能はず。蓋し余また時時其の狂の託する所あることを伺ひ知る。……子和酒を嗜む。大いに酣飲する毎に、扼腕して高論し、唇吻加々弁なり。然れども時好を追つて資を取らんことを欲せず。数々流俗の爲に好みせられず、凡そ爲す所益々奇にして、而して其の生産もまた益々澁す。

南郭自身は柳沢家致仕の前後を除いて生涯激情を露わにすることなく、行状つねに穩健の人であったが、徂徠学を文学運動の根拠に転換せしめたほどの強い自我は、よく金華の狂簡を理解した。

○秋、七律「和万庵和尚作三首」〔初・四〕がある。万庵の名が『南郭先生文集』に登場する最初である。万庵、名は原資。芝東禪寺の住職で、古文辞の詩をよくした。護園一門との親交はこの頃から開けたものか。なお寛保元年十月の項（一七二頁）参照。

享保五年 三十八歳

○秋、芝増上寺附近へ移居した。七律「移居二首芝南作」〔初・四〕七絶「九月十三夜作。余時移居芝山南浦」〔初・

五)がある。移転先が増上寺の近辺であったことは、享保六年春の「与三大潮師」(初・九)に「不佞、近ごろ宅を紫芝山下に移し、則ち縁山の諸苾芻びつしゆと日々に文を以て会す」というのによつて知られる。Ⅲ二〇二頁参照。縁山は増上寺の山号三縁山を修した称。

南郭はこの附近で度々居を移しており、『芙蕖館聞書』には新網町・富山町・山王町・宇田川町の地名が挙がる。もう一個所、三島町にも住んだことが知られる(享保十一年五月の項、一三二頁参照)。うち富山町・山王町・宇田川町・三島町に住んだ時期は判明しているが、新網町については不明である。この享保五年秋の転居先が新網町(現港区浜松町二丁目)であろうか。

解脱院様(南郭) しんあみ町に御座被<sub>レ</sub>成候時、大孺人妙栄様俗名(母吟子) しんあみ町の陋地を御覽被<sub>レ</sub>成候て、はだかじまとて御わらひ被<sub>レ</sub>遊候由。○しんあみ町は貧人のおるところにて、夏になれば男女皆はだかになるゆへ也。(『芙蕖館聞書』)

と伝えられるような土地柄であるから、困窮のさ中にある南郭の転居先としてまことにふさわしい。

この地で、元禄三年上総流寓から帰ってきた徂徠が同じ増上寺近辺で舌耕を行った故智に倣ったものか、南郭は私塾を開いた。『増一話一言』一六に見える香山の言は享保十三年ごろ三島町に転じてからの有様をいうが、似たようなものと思われるのでここに掲げる。

(南郭は)初め増上寺門前三島町にて講釈せしが、屋の棟ひきくして人々の頭をうたん事を恐れ、古詩十九詩を紙にかきて梁にはり置きし頃より講席につらなりしと、青山の香山和尚の物語也。

場所がら生徒には増上寺の僧侶が多く、南郭の指導のもとにやがて玄海・義海・雲洞・忍海・香山等の文人僧が輩出する。ここに挙げた僧、すべて『縁山詩叢』に出る。

享保六年 三十九歳

○春、「与<sub>三</sub>越君瑞<sub>二</sub>」(初・九)を裁して、越年の資金を恵まれた礼を述べた。I二一六頁参照。

○四月一日、大番頭の役にある本多猗蘭が京二条城在番に当り、上洛した。葦園一門が送別の詩会を催し、南郭に「西台侯別筵。分賦<sub>三</sub>二二体<sub>二</sub>得<sub>三</sub>五言古<sub>一</sub>。侯師<sub>三</sub>戊酉京<sub>二</sub>」(初・一)「同六言律」(初・二)がある。猗蘭を領地河内西代(にだ)に因んで西台侯と称する。

○九月、徂徠が幕府から『六論衍義』に加点することを命ぜられた。徂徠自身は『六論衍義』のごとき通俗道德書の価値をほとんど認めていなかったが、日ならずして完成した彼の加点は將軍吉宗を大いに満足させた。翌七年二月二十九日に徂徠は江戸城中に召されて時服一重を拝領する。II一二二頁参照。なお事の経緯は中村忠行氏「儒者の姿勢——『六論衍義』をめぐる徂徠・鳩巢の対立——」(『天理大学学報』第七八輯)に詳しく考証されている。徂徠が時服を拝領した時に、南郭に五排「徂徠先生奉<sub>レ</sub>教校<sub>レ</sub>書。書頒行。特賜<sub>三</sub>時服<sub>二</sub>。賦<sub>レ</sub>此奉<sub>レ</sub>贈」(初・三)がある。

○秋、「与<sub>三</sub>島婦徳<sub>二</sub>」(初・一〇)を裁した。I三三二頁およびII二〇四頁参照。

○十一月、「唐後詩序」(初・七)を撰した。III一九七頁参照。

○同じく十一月、仙台にある田中桐江のために「東海漫遊稿序」(初・七)を撰した。正徳三年に柳沢家を出奔した桐江はこの年五十四歳。仙台に住んでいた。享保九年に摂津池田に移って詩社呉江社を開き、その地で歿する。文集『東海漫遊稿』は南郭の序を冠して享保七年に刊行された。

○この年か、七律「雨中望君彦席上会<sub>三</sub>連阿上人<sub>一</sub>。主人有<sub>レ</sub>詩。和以奉<sub>レ</sub>謝」。「雪中和<sub>三</sub>答望君彦見<sub>レ</sub>贈<sub>二</sub>」(ともに初・四)がある。望君彦は望月鹿門。名は三英、君彦は字。『南郭先生文集』初編を伊藤南昌とともに校訂した門人である。丸亀藩医の家に生れ、元禄十六年七歳で親戚の幕府御典医望月家の養嗣子となった。この年二十五歳。このころ南郭の

塾がすでに有力な門人を育てていたことを知りうる。享保八年に裁された金華の「送<sub>ニ</sub>女海上人<sub>一</sub>序」(『金華稿刪』四)になると、

子遷(南郭の字)、業巳に従遊雲の如し。四方の屨、戸に満つ。

と。なお翌七年四月、南郭は鹿門の著わした『明医小史』に序を与える(初・七)。

享保七年 四十歳

○この年、『南郭先生文集』初編の刊行が企てられた。金華の「南郭集序」がこの年七月朔付けになっている。文中いう。

子遷、業巳に罷め去つて益々困す。而して其の意飄焉として颺り去つて致すべからず。老母堂に在り、拙き者政を為し、菽を嚙り水を飲み、児戯斑斕、晏如として日を竟へ、老いの將に至らんとすることを知らず。……天既に子遷をして芸苑に駆馳し、左氏司馬子長なる者と千古旦暮、各々其の美を擅にせしむ。……則ち吾が大東をして堯舜の国に抗衡せしむる者は、子遷か、あらざるか。

刊行の準備は着々と進められていたが、翌年と翌々年の火災で草稿すべて灰燼に帰した。

○この年までに、兄元恵の遺児で南郭が引取っていた通子が、山城伏見の坪井益秋に嫁していると推測される。益秋、号は浄英、通称は喜六。父の代からの伏見船元締で、延享版『難波丸綱目』第三冊に

▲伏見船式百艘伏見支配

元ノ 伏見住 坪井喜六

と見える家柄である。右の坪井喜六は年代からして益秋の子供か。

伏見船は淀川水運の利権をめぐる過激書船と対立が激しかった。東大史料編纂所に写真を蔵する南郭宛て徂徠書翰

(服部家藏。昭和九年十一月に撮影、計五通)に、次の一通がある。

南郭足下

徂徠 (表書)

先日者御心□□得<sub>レ</sub>御念、致<sub>二</sub>大慶<sub>一</sub>候。愈御家内御替候御事も無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>、御不快も愈御快御座候哉、承度候。爰元無<sub>二</sub>別条<sub>一</sub>罷有候。扱者昨日豊侯へ参、過所之事承候。先年諏訪美濃殿下向之節、過所・伏見之事、御尋候上にても仰付候儀故、伏見船漬之願は叶申間敷候。依<sub>レ</sub>之舟賃直段上り候而極り可<sub>レ</sub>申候由、御物語に候。豊侯と美濃殿のかゝりに候。淀をも漬度由候へ共、是は内証にて留置申候由に御座候。淀は過所之支配故、甚□に懸候は伏見之由に候。過所願之趣は尤と奉行衆は聞受被<sub>レ</sub>申候へ共、右之訳故、伏見船漬れは仕間敷に候。以上

四月朔日

豊侯は河野豊前守通重のことで、この人物と、同じく文中の諏訪美濃守頼篤とがともに京都町奉行であった期間の四月一日は享保六年と七年とであるが、六年では河野氏の就任直後(六年二月十五日佐渡奉行より転ず)で事情も不案内であろうから、しばらくこの書翰を享保七年と定める。過書船が伏見船の取漬しを訴え出ることがあり、心配した南郭が徂徠を通じて担当官の意向を尋ね、取漬されることはないと知らされた内容である。

南郭が心配したのは、すでに通子が坪井益秋に嫁していたからであろう。この年益秋は三十八歳。両家の縁組には、服部家がかつては京都で天野屋を名乗るかなりの商家であったことがあざかったと思われる。益秋に依頼されたのもあるが、このような配慮をするところに家庭人としての南郭の面影がしのばれる。また南郭の願いを容れて河野通重にわざわざ事情を尋ねてくれた徂徠の人情の暖かさもなつかしい。

なお南郭はこの一件をはるか後年、寛延元年の「浄英子墓碑」(四・六)に書き留めている。松下烏石の書で南郭の碑文を刻した益秋浄英の墓が黄檗山万福寺裏の万松岡に現存する。

○この年夏に裁されたと推定される「答<sub>ニ</sub>玄海師<sub>一</sub>其<sub>一</sub>」(初・一〇)に、近況を次のように告げる。

不佞は則ち風塵栖栖、惟日も足らず。近ごろまた東隣に移居するの挙あり。環堵四壁、土木を勞するに足らずと雖も、然れどもまた拮据自ら作し、手口卒く瘖む。計るに七月の交、脯戸以て成らん。

すなわち東隣に移居のことがあった。玄海は長崎の浄土宗大音寺の僧。増上寺にいる間に徂徠・南郭に学び、享保八年夏長崎に帰った。

○同じくこの年の稿と思われる「答<sub>ニ</sub>西台侯<sub>一</sub>」(初・一〇)に、舌耕の生活ぶりを報じていう、

講授惟日も足らずとし、佗に出でざること或いは数月を越ゆ。……喬(元喬、南郭の名)今や医卜と伍を為し、伎術もて糴を貪るに近し、極めて卑卑たることを知る。設令聴く者をして頤を解かしむるも、また自ら一閭里の師、嘖嘖の態、君侯に陳説すべからず。……講率ね八鼓前を以て畢ふ。

享保八年 四十一歳

○春、太宰春台が小石川に居宅を営み、紫芝園と号した。南郭に七律「同<sub>ニ</sub>子和秀緯<sub>一</sub>集<sub>ニ</sub>徳夫紫芝園新宅<sub>一</sub>。子和携<sub>レ</sub>魚得<sub>ニ</sub>園字<sub>一</sub>」(初・四)がある。

新築<sub>ニ</sub>閑居<sub>一</sub>負郭村 日看轍迹破<sub>ニ</sub>苔痕<sub>一</sub>

魚余任父携供<sub>レ</sub>饌 酒飽壺公懸滿<sub>レ</sub>樽

蕭寺墻東移<sub>ニ</sub>宝樹<sub>一</sub> 商山郊北卜<sub>ニ</sub>芝園<sub>一</sub>

屢來許<sub>レ</sub>弄<sub>ニ</sub>鳴蛙興<sub>一</sub> 我輩非<sub>レ</sub>閑<sub>ニ</sub>鼓吹喧<sub>一</sub>

春台、名は純、字は徳夫。この年四十四歳。秀緯は同じく徂徠門の守屋峨嵎、名は煥明。この年三十一歳。南郭・金華と親しかった。宝曆四年に歿し、南郭は「峨嵎守屋君墓碑」(四・八)を撰することになる。やがて徂徠歿後に対

立を深める春台と南郭の間にも、このような交わりがあった。春台は小石川伝通院に寓居して享保六年火災に遭い、紫芝園に移るまで芝浦に住んだから、南郭と住居も近かった。

○秋、刈谷藩士久津見華嶽が初めて詩を寄せてきた。刈谷藩に仕えていた平野金華の紹介による。南郭は七律「和答参州源京国見寄。二首」（初・四）をもって酬いた。華嶽、名は義治、字は京国。源姓を称する。やがて徂徠入門する。詩集『華嶽遺稿』が早稲田大学図書館服部文庫に写本一冊として残る。

○十月二十四日、火災に遭った。『月堂見聞集』一六によると、卯の刻愛宕下の酒井右京屋敷から出火、南東に及んで増上寺の東側一帯を焼いた。南郭は家財一切を失って山王町（現中央区銀座八丁目）に仮寓した。翌年六月長崎の玄海に宛てた「答ニ玄海師。其二」（初・一〇）に報ずる、

客歳賜ふ所の書、案上に捧誦すること五六日、東門火を失して、禍ひ陋巷に及ぶ。文房の具よりして賤家の旧物、一掃に烏有となんぬ。……此の時に方つて、不佞の羸れたる、老いを扶け幼を携へて、卒卒乎として避くるに暇あらず。徒に裸にして火坑を脱するを幸ひとするのみ。遂に司馬門内山王街に仮居し、改歳にして卜築せんと期す。

享保九年 四十二歳

○正月二月、次男惟恭が生れた。早くから穎才を現わし、南郭が期待をかけた子であったが、元文元年十七歳で夭折した。

○正月、嵩山房須原屋新兵衛が南郭考訂の『唐詩選』を刊行した。小本一冊。南郭の書物の刊行された最初である。徂徠の門下の書物としては、『問榘崎賞』（I一九六頁参照）を別にして、享保七年刊行と思われる鷹見爽鳩の『詩筌』に次ぐものであった。徂徠は跋文を贈って花を添えた。巻頭の南郭の「附言」について、徂徠はこれを五たび書き改

めさせたと『先哲叢談』南郭伝に伝えるが、徂徠の「与服子遷其七」(『徂徠集』二二)には、「唐詩選附言、謹んで開す。後学の津梁と謂ふべし」としか見えないので、どうであろうか。

『芙蓉館提耳』(宝暦三年から四年にかけて、南郭の教えを門人が記録したノート。早大図書館服部文庫蔵。写大本三冊)上の宝暦四年六月二十三日条に、

一、唐詩選附言、「人或謂」、或ノ説ハ唐仲言ガ唐詩解ノ説也。

一、唐詩選来翁跋文、「近来坊間諸本率属孟浪」ハ、コレハ唐詩選ノ諸本ノ事也。「何物狡兒巧作五里霧」、コレハ唐詩訓解ヲサス。

との解説がある。『唐詩選』は『唐詩訓解』の書名で近世の初期から版行されてはいたが、『訓解』の注を削って本文のみを小本に収め、行間に境界線を引くなど版式を読み易く改めた南郭考訂のテキストが、古文辞派の抬頭と相まって大流行した。一七六頁参照。享保九年の初版本は稀覯に属する。南郭生前に、寛保三年正月、延享二年五日、宝暦三年九月と、三たび版を重ねた。南郭への対抗意識からであろうか、太宰春台は「書唐詩選後」(『紫芝園後稿』一〇)を著わし、不審十箇条を挙げてその精選にあらざることを主張した。

版元の嵩山房小林氏は護園諸子と親しく、彼等の書物を多く刊行した。松崎観海の「嵩山房小林歳仲墓碣」(天理図書館蔵『観海集』四)に、「人と為り慷慨、好んで人の窮を憫み、尤も儒士を愛す」との一節がある。

○正月、平野金華に移居のことがあった。南郭に七絶「子和移居北里不見数月。作此寄憶。五首」(初・五)がある。其五を掲げる。

一 双鴻雁晚来孤 東畔哀鳴西畔呼

各向兼葭深处宿 月明望断洞庭湖

○正月三十日、再び火災に遭った。『月堂見聞集』一六によれば、午の刻加賀町から出火して、芝口見附北側一帯を焼いた。前掲の「答<sub>ニ</sub>玄海師<sub>一</sub>。其二」に続けていう、

豈に凶らんや、孟春の晦、火寇再び侵し、災後の營する所、衣裘釜鬲、また皆一時に奪はる。老幼妻孥、蕭然として塗に相見る。吾が舌尚ほ在りやいなや、則ち足んぬと謂ふに至る。是より先、不佞病んで風すべからざること十月、災を避くるの時に方つて、猶ほ臥褥に在り。周章として寒を冒すに至つて、遂に起たざること月を弥つて、然れども幸ひに病ひ肌膚に在つて未だ五内に至らざれば、乃ち稍稍に愈ゆることを得。此の時諸君また相謀つて、為に一草堂を青竜寺富山街に構ふ。乃ち家人を率ゐて入りて棲息すれば、則ち徒に四壁のみ立てり。小家の一二、経営せざることを得ず。手口<sub>ニ</sub>率<sub>一</sub>く瘠<sub>ヤ</sub>み、更に勞疾を得たり。

前年十月とこの度との二度の火災で、望月鹿門の『南郭先生文集』初編跋(享保十年八月付け)によれば、刊行の準備の進められていた文集の草稿がすべて失われた。

転居先の富山町(現港区西久保広町)は崖下の陋巷で、南郭をはなはだ憂鬱にさせた。移居直後か、五律「災後賃<sub>ニ</sub>居西窪<sub>一</sub>。地甚陋惡。戯作遣<sub>レ</sub>悶」(二・三)がある。

民居因<sub>ニ</sub>澗道<sub>一</sub> 撲<sub>レ</sub>地鑿<sub>レ</sub>空間

危樹牆東岸 頽沙屋後山

無<sub>ニ</sub>家容<sub>ニ</sub>病膝<sub>一</sub> 何処破<sub>ニ</sub>愁顔<sub>一</sub>

曲折塩車坂 時同<sub>ニ</sub>羸馬<sub>一</sub>還

○三月、『徂徠先生答問書』の序を撰した(初・七)。この書の編者は根本武夷であるが、本多猗蘭の「答問書序」によれば、南郭も校正にたずさわったと。刊行されたのは享保十二年五月。

○夏、長崎の玄海に「答<sub>ニ</sub>玄海師。其二」を贈った。前引のように二度の火災のことを報ずるが、他にこの年は親友の金華が、おそらく春、刈谷に赴いて帰らず、守屋峨嶺が大垣藩に仕えて同じく春江戸を去り、小倉藩に仕えていた土屋藍洲が秋には江戸を去ることが予定されており、火災避難の折の無理がたたつて体調すぐれず、種々相まって悲愁孤独の感が深かった。玄海に訴えていう。

今に至つて六月、炎熱日々<sub>ニ</sub>に熾<sub>レ</sub>なり。尚猶<sub>なほ</sub>奄奄<sub>と</sub>たる地下の人のみ。洒洒<sub>と</sub>たる文辞の雅も、廃絶<sub>已</sub>に年を逾え、即ち一二の会盟も、厠<sub>ま</sub>はらざること久し。甚だしいかな、吾の衰へたるや。復た旧時の南郭服子遷<sub>に</sub>あらず。

○七月四日、この日付けで徂徠が南郭に書翰を発した（東大史料編纂所蔵写真）。

小右衛門様

惣右衛門（表書）

御手紙拜見。残暑強御座候所、愈御無事、珍重存候。御病氣段々御快候由、予侯<sub>レ</sub>伝承、致<sub>ニ</sub>大慶<sub>ニ</sub>候所、大孺人御病氣之由、此間君瑞物語にて致<sub>ニ</sub>承知<sub>ニ</sub>、千万無<sub>ニ</sub>御心元<sub>ニ</sub>存候。貴札之趣、漏血も止、段々御快御入候由、珍重存候。段々参候へば、滯は無<sub>レ</sub>之物に候。畢竟当年天氣不<sub>レ</sub>正故、病氣表<sub>レ</sub>候と存候。如<sub>レ</sub>此之時節、諸事被<sub>レ</sub>付<sub>ニ</sub>御心<sub>ニ</sub>、只々保護第一と存候。扱<sub>レ</sub>は愚家無<sub>ニ</sub>別条<sub>ニ</sub>候。移宅之事、儼来に任せ引移申候。御紙面之趣、被<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>御念候儀、其御つめひらきには及不<sub>レ</sub>申事と存候。石川書状御届、忝存候。石川喜内殿、暴病にて昨夜死去候。黙齋力落、無<sub>ニ</sub>申計<sub>ニ</sub>候。誠に当年は吾党之百六と存候事に御座候。被<sub>レ</sub>懸<sub>ニ</sub>御心頭<sub>ニ</sub>、御書諭忝存候。移居匆忙故、久々御使も不<sub>ニ</sub>申入<sub>ニ</sub>、御見舞忝存候。今度之宅、其元辺え少々近罷成候哉と存候。移居相濟候て、可<sub>ニ</sub>申承<sub>ニ</sub>候。以上

七月四日

徂徠は享保五年以来神楽坂赤城町に住んでいたが、この年火災に遭つて市ヶ谷大住町に転居した。予侯は伊予守本多猗蘭、君瑞は越智雲夢（曲直瀬養安院）の字。幕臣石川喜内之俊は徂徠門下の石川大凡（別号黙齋）の甥に当る。

「当年は吾党之百六（厄運）と存候」というのは、もとより正月の南郭再度の火難を含んでいる。

○十月、京都の宇野士朗が江戸に来たり、徂徠に入門した。士朗の「東海紀行」（中村幸彦博士蔵写本『宇野士朗遺稿』三）に、「甲辰孟冬を以て江戸に来たる」と。南川金溪の『閑散余録』上によれば、すでに徂徠と相知っていた入江若水の勧めによる東下である。

士朗、名は鑑。初めの字は士茹。明霞の弟。この年二十四歳。士朗の入門は護園の人脈の上方へ及ぶ橋頭堡となった。

○この年春、京都で法帖『洛陽道詩』が刊行された。尾張藩士山田伝太夫の娘で書法に神童の名のあったお林の、六歳の折の草書を刻した法帖である。ことごとしくも巻頭に、「華人贈言」として十六人、「名公贈言」として大学頭林榴岡・徂徠・伊藤東涯・雨森芳洲等名流十八人の贈言を掲げる。護園から名の見えるのは徂徠だけであるが、春台に五律「題『阿林帖』」（『紫芝園後稿』一）、鷹見爽鳩に七律「題『童阿林字軸』」（『爽鳩詩稿』）がある。山田氏にか、一応乞われて草したものであろう。南郭に詩のないのは、彼の詩名がいまだ護園の外部には聞えていなかったことを示すか。

享保十年 四十三歳

○五月、宇野士朗が京都へ帰った。士朗の七律「戊申端午」（『宇野士朗遺稿』一）の序に、「乙巳の歳、余、東より帰り、五日を以て相水を過ぎ、函嶺の下に宿す」と。南郭は五古「餞別子士茹婦西京。四首」（初・一）を贈って、西京で徂徠学を宣揚するよう励ました。

○六月、この年江戸に出ている入江若水が京都へ帰った。産を破って洛西嵯峨に隠棲し、一種文人の理想を達成したと見られていたこの詩人に、この出府の折南郭は初めて会ったのであった。時に若水五十五歳。四年後に歿する。若

水の東下の事情については、拙稿「入江若水伝資料」(大谷篤藏編『近世大阪芸文叢談』所収)で触れた。南郭は帰洛する若水に「嵐山樵唱集序」(初・七)を贈り、若水の吟詠三昧の自在な境涯を羨む情を述べた。

其の物を観、巧を寄せるや、草木風雲の変、鳥獸魚鼈の態、其れ將た造化の蘊を奪ふか。夫れ詩は志なり。山人(江山人、若水を指す)固より夫の智を飾り名を沾る者を惡むときは、則ち其の詩や隠を以てす。隠にして其の興以て止むべからざるときは、則ち其の隠や、詩を以てす。此れ其の真や、未だ繩墨を引きて論じ易からず。

徂徠の「敍江若水詩」とともに南郭のこの序を冠して、若水の詩集『西山樵唱集』の刊行されたのは、享保十九年正月のことである。

○十月、徂徠が「南郭初稿序」を撰した。南郭の詩文を評している。

蓋し滄溟(李攀竜)に刻意して、豈弟(李)之に過ぐ。乃ち瀟瀟乎たる中土の音なり。務めて纖巧を裁し、輕俊を押さへて、以て温厚和平の旨に就く。是れ以て諷するに足れり。它日子遷をして一方に木鐸たらしむれば、詩の教へ、之を一世に被らしむるに庶幾(しか)からんか。文また然り。然れども其の慧にして才の敏なる、故に其の巧と俊と、終に或いは全くは之を闕(くわ)づること能はず、時に之を出だす。子遷乃ち有らざる所なきのみ。

○この年中に、『南郭先生燈下書』が執筆された。本書の刊行は享保十九年正月であるが、本文中に「去年中、書賈に申付け、李于鱗唐詩選刊行致させ候て、愚案を例言に書加へ候。板に行はれ有之候間、御覽候べし。」

という一節があり、『唐詩選』の刊行は前年享保九年正月であるから、本書をこの年の成稿とする。静嘉堂文庫と早稲田大学図書館に本書と同じ内容で『南郭先生詩話』と題する写本が蔵されており、書写の年次はともに享保十三年である(村上吉広「服部南郭の燈下書」、『フィロソフィア』第五八号)。版行以前からこの書名で流布していたことを知り

うる。

本書の刊行にかの林東溟があずかっているため、これを偽書とする説がある。すなわち徂徠に仮託された『詩文国字版』に冠した東溟の序に、「一日、備の人鍋島公明、徂徠・南郭二先生の国字版なる者を持し来たり、之が序且つ校を請ふ」とあるが、『詩文国字版』が明らかな偽書であるから、もう一つの南郭の国字版、それは当然『燈下書』を指すが、も偽書の疑いが持たれるわけである。『先哲叢談』林東溟伝では、両書を林東溟のもとに持ちこみ、かつみずから『詩文国字版』に後序を附した鍋島公明が両者を偽作したと推定する。

三つの理由をもって、私は本書を南郭の真作と断ずる。まず右に見るごとく、この書は版行の少くとも六年前から写本である程度流布していた。偽書であるとすれば、南郭がこれをチェックする機会がその間まったくなかったとは考えにくい。次に宇佐美瀧水の『瀧水雑著』に、徂徠の『答問書』、大宰春台の『六経略説』、山県周南の『為学初問』など十七点を、「右ノ国字書ドモハ、物家学流ノ案内ノ好書ナレバ、是ヲ能ク読ンデ合点スベシ」として挙げた中に、本書が含まれている。瀧水は南郭と交わりがあり、かつ南郭の「物夫子著述書目記」（四・六）を補正したほどの篤実の士である。現に右の十七点中には、偽書ながら「物家学流ノ案内ノ好書」である『詩文国字版』『護園談余』を含めていない。その瀧水が本書を南郭の真作として扱っているからには、それを信じてよい。さらに、はるか後年の宝暦二年、萩にあった滝鶴台は東下する林東溟に託して書を南郭に寄せた（「南郭先生」其六、『鶴台先生遺稿』八）文中、東溟が「書を著はして仮託し、及び某書を私刊するを以て、罪を諸老先生に得」た前歴を不問に付し、門下に加えてやってほしいととりなしている。これは右の『詩文国字版』の一件や、東溟が春台の『斥非』を盗刻したこと指す。鶴台は山県周南のもとで同門だった東溟に依頼されてであろう、享保十九年の『南郭先生燈下書』刊行の折にはこれに序を与えている。もし本書が偽書であるなら、彼は自分自身が東溟にだまされることによって、南郭を傷

つけたわけである。いくら東溟への友情があったにしても、右のような書信を南郭に贈るのは厚顔無恥といわねばならない。

本書が南郭の真作となると、女々しく未練な人情こそ風雅の情であるとする、本居宣長の『排芦小船』や『石上私淑言』の一節を思わせる風雅観を、南郭が確固として抱いていたことが知られて興味深い。Ⅱ一七〇頁参照。『芙蓉館提耳』上の宝暦三年十月条に、『唐詩選』六の五絶「班婕妤」の解釈が見える。この詩について、婕妤が怨みを強いて抑えているさまを詠じたものとする説に対して、南郭は婕妤の怨みの情を力説する。Ⅱ一八二頁参照。『燈下書』で述べたところの未練の情を重視する人情論は、終生保持されていたのである。

便宜上ここで触れておくと、右の『芙蓉館提耳』の解釈はそっくり『唐詩選国字解』の当該部分に取り入れられている。『芙蓉館提耳』に数首ある『唐詩選』の解釈は、粗雑な要約・敷衍を経た形でそのまま『唐詩選国字解』に見出される。『唐詩選国字解』は、南郭に似つかわしくない幼稚な誤りや、入江南溟の『唐詩句解』からの剽竊を含んでおり、かつ天明二年嵩山房から刊行される以前、ほぼ同じ内容で作者の名前も明らかにしない曖昧な版が、『唐詩選謄解』の書名で明和四年潜竜堂前川庄左衛門から刊行されており、全面的に南郭の口述であると信ずることはできない。おそらくは『芙蓉館提耳』と類似の、南郭の講義を門人が筆録したノート様のものが『唐詩選』全体にわたって存在し、後人がそれに適宜手を加えて成ったのであろう。

享保十一年 四十四歳

○春夏の交、「送矢子復一序」(二・六)を撰して、摂津へ旅立つ矢島庄五郎に与えた。Ⅲ二〇五頁参照。南郭が矢島庄五郎なる人物に宛てた書翰が、今治市河野記念館に一通(河野信一氏「私の今治市へ寄附したる文化財総覧」下に写真掲出)、早大図書館服部文庫に三通(服部匡延氏「服部南郭資料」に翻刻、『近世中期文学の研究』所収)残されている。河野

記念館蔵七月二十七日付けの書翰は五月の宇田川町への転宅（後述）のことを報じていて、この年裁されたものと定めうる。すると服部文庫蔵の三通は、内容相互の関連から右に続いてそれぞれこの年十月二十三日・十二月二十一日・翌享保十二年一月二十五日付けと判明する。これらの書翰で「送序」を推敲清書して進上すべきことにたびたび言及しているから、「送矢子復序」は矢島庄五郎に贈られたもの、矢子復は矢島庄五郎を指すと断じてよい。七月二十七日付け書翰の冒頭に、

五月七日之貴翰、其節相達、拜見。先以遠道無御別事、御老母様始御平安に御到着被<sub>レ</sub>成、目出度奉<sub>レ</sub>存候。とあるをもつて、矢島氏の江戸出立を春夏の交と推定する。

「送矢子復序」に、子復の主人は摂津の溝杵（現大阪府島下郡溝杵村）に領地があり、子復を代官として派遣すると述べる。享保十一年当時の溝杵村の領主は、『大阪府全志』三によつて検するに、天領を除いて、高槻藩主永井直期・旗本長谷川勝知・同宮崎成久の三名であり、高槻藩から溝杵村へ代官を派遣することはありませんから、矢島氏は長谷川・宮崎いずれかの家中である。

七月二十七日付け書翰に

伏見御通之節、喜六方へ御立寄、伝語も御達被<sub>レ</sub>下候由、被<sub>レ</sub>懸<sub>ニ</sub>御心<sub>一</sub>、万忝奉<sub>レ</sub>存候。

という一節があり、以後の書翰にも同趣の文言が見える。矢島氏は南郭の兄元恵の遺児通子の嫁ぎ先、伏見の坪井喜六益秋のもとをたびたび訪れてやったわけである。

「送矢子復序」は、矢島氏に代官として民を治める心構えを論じた文章である。「其ノ位ヲフマズシテロニマカセテ云フ時ハ、云ハレヌコトハナケレドモ、経済ニカケテハサハナラヌコト也」（『文会雜記』一上）と、経済に志を絶つた南郭は政治に対して意識的に口をつぐんだから、この種の文章は他にはるか後年宝暦四年の「贈<sub>ニ</sub>熊本侯<sub>一</sub>序」（四・

五) くらいしか見当らない。説くところは、宋儒の治心の道によつて統治しようとする、道徳をもつて厳しく民を責め、「苛察きよさつ 繳繞きようじょう、名法(名家のやり方)に近いい、酷薄な政治になる。そこに心して先王の治の「雍容寛厚の風」を実現せよと。一体、南郭は経義経済を論ぜねばならない場合には徂徠の説を祖述することに決めていたようで、奥田尚斎の『元継筆記』に伝える、

南郭ハ経書ニ説ハナシ。人ガ尋ヌルト、経学ハ徂徠先生ニ学ブト云ヒテ、徂徠ノ説バカリヲ云ハレシト也。一見識ナリ。

徂徠の説を祖述するにあたって、詩文に性情を養う願望を託した南郭は、多岐にわたる徂徠の「政談」も、動機にまでさかのぼれば寛容主義の一点に絞られることをよく理解していた。

○五月、宇田川町(現港区浜松町一丁目)に移居した。前掲七月二十七日付け矢島庄五郎宛て書翰に、

五月中、宇田川借宅少々造作仕、引移、今程安堵、悦申事御座候。とくに御返書可レ仕本意に候処、夏中は移居之騒動之余、日々用事指つかへ、七月に入候而も残暑殊甚、彼是及ニ延引、御無沙汰罷成候。

と報ずる。「答ニ独雄師ニ(二・九)」にも、「仲夏、雪軒師、師の書を致す有り。不佞、移舎の举有り、忽忽報ぜず」と告げる。宇野士朗の「与ニ服子遷ニ書」(「宇士朗遺稿」五)にいう、

郷よに望生(望月鹿門か)の書来たるによつて知る、先生移居して、湫隘を去つて増爽なる者に就くと。状良まことに賀すべし。

富山町の陋巷から脱して、南郭はひとまず満足したことであろう。なお享保十五年冬に南郭は赤羽あかばに移るが、その折越智雲夢の贈った七律を「寄ニ懷子遷子遷去年自三島巷移赤羽」(「懷仙楼集」五)と題するので、享保十五年以前に宇田川町から

三島町(現港区芝大町一丁目)に移居していたことが知られる。文集中にその時期を徴すべき詩文はない。

○この年、後に門人の中西氏仲英に娶せる四女登免子が生れた。享保四年に生れた次女は翌年歿し、六年に生れた三女は里子に出した。

享保十二年 四十五歳

○中元、このころ毎年江戸と萩を往復していた山県周南が、帰国を間近に控えて、徂徠・南郭・金華等を墨水の舟遊びに招待した（七律「墨水泛舟作」序、『周南先生文集』一）。徂徠は翌年正月歿するので、護園最後の燕集であった。南郭の七律「泉次公泛舟宴徂徠先生。同賦得「秋字」」（二・四）

蘭槩回旋墨水流 清風落日繫江頭

海崖潮裂三叉湧 橋上虹吞三國浮

杯酒日来迎望夜 絃歌雲駐入涼秋

誰知俱是龍門客 縹緲偏同僊侶舟

○七月、京都で『熙朝文苑』が刊行された。古文辞派抬頭以後の新らしい文字観に基づいて編纂されたものではないが、『搏桑名賢詩集』『同文集』以来久々の本格的な詩文の総集である。南郭は護園から徂徠・春台・東野・石川大凡とともに入集し、文一首・詩一首を採られた。文は「東野先生墓碣銘」、詩は文集に未収録。

服元喬姓服部字某号南郭

同席得楓字

満園嘉樹靄丹楓 肯許詩成同角弓

縫掖先生殊客席 羔裘卿相自公宮

赤城日動孤霞落 白馬雲停匹練通

なお採録された東野の文三首がいずれも『東野遺稿』に漏れていることを付記する。

○九月、『南郭先生文集』初編が嵩山房から刊行された。徂徠に入門した正徳初年から、享保十年ごろまでの詩文を収める。内題・外題とも「初編」をうたっており、初めから続編が予定されていた。校合の門人は望月鹿門と伊藤南昌。南昌、名は元啓、字は維廸。南部の人。初編の詩文に名前を見ない。

なお主として初編の刊行にかかわるものであろう、津阪東陽の『夜航余話』下に次のように伝える。

篠崎金吾和学弁に、時風の軽薄をそしりて、先づ死なぬ内に詩文集を板行したがる世の中なればといへるは、護園の徒を指したるなり。奥田三角へよせたる書を見るに、南郭文集上木いたし候。存生の内に家集を公にするは、めづらしき事にて候。彼の社中にもをかしがり候。然れば生前に集を版にするは、南郭よりぞ始まれる。今は世のならはしとなりて、あやしむ人もあらざるなり。

篠崎東海の『和学升』には右の文章が見えないから、東陽の記憶違いか。『南郭先生文集』初編は護園諸子の文集として最も早いものであるから、社中にとかくの声があったのは事実かも知れない。さればこそこの挙に、詩文に賭けた南郭の自負を見るべきである。

○冬、病床にあった徂徠が宇佐美瀧水に命じて門人の詩を輯録させた。いずれは自分が手を加えて、護園一門の総集として上木するつもりだったのであるが、果さないうちに歿した。この企画が後の『護園録稿』となり、南郭・春台対立の一因を作った。

○十二月八日、本多猗蘭が南郭に書翰を発した。渡辺刀水氏「本多猗蘭侯(三)」(『東洋文化』一三五号)所掲。その一節を引く。

徂徠不快の趣共、此間養安院被<sub>レ</sub>參、物語候由、能孝（猗蘭の近臣）承<sub>ニ</sub>知之<sub>一</sub>申伝候。浮腫の気味候の由、益氣湯に人參入候て用候由。養安院はさらりとしたる薬用ひたきものと、徂徠へも被<sub>レ</sub>申候へども、一円合点無<sub>レ</sub>之由に候。何とも気の毒千萬存候。来（徂徠）兼ての理窟共と存候。薬の相違にて段々不快の趣に成候へば、万々気の毒に候間、何とぞ側よりちと申度ものに候。足下ならでは御申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下もの無<sub>レ</sub>之候間、申入候。

薬を取りかえるよう徂徠に意見できる者は、南郭以外にはないと。最晩年の徂徠が最も信頼した門人は南郭であると、社中で許されていた次第をうかがわせる。

○この年、摂津池田に隠棲して呉江社を開いていた田中桐江が六十歳。南郭は「寿<sub>ニ</sub>富春山人六十一序」（二・六）を贈った。

享保十三年 四十六歳

○正月十九日、荻生徂徠が歿した。享年六十三。南郭に五排「哭<sub>ニ</sub>徂徠先生<sub>一</sub>」（二・三）「祭<sub>ニ</sub>徂徠先生<sub>一</sub>文」（二・八）がある。門人それぞれの個性を博大な人格で包摂していた師を失って、護園諸子の悲嘆は大きかったが、特に南郭にとっては、柳沢吉宗のもとの楽しい思い出を共有する師である。あたかも柳沢家を致仕して丁度十年、かつて甲斐藩邸にあった四人のうち、東野は早く歿し、今徂徠逝き、桐江ははるか摂津にある。往事茫茫として南郭の孤独感は一ひとお深かった。桐江の「寄<sub>ニ</sub>服子遷<sub>一</sub>」（「樵漁余適」二）に答えてこの年裁した「答<sub>ニ</sub>富春叟<sub>一</sub>」（二・九）にいう、

来書の示す所、二十年の前、曷<sup>た</sup>か維れ其れ忘れん。而して東壁已に異物と為り、先生また此<sup>こゝ</sup>に下世す。当時目撃、また独り足下と不佞とのみ、一大夢なるかな。以て相泣くことを為すべし。不佞、老兄より少きこと十数歳、然り而うして羸病憔悴、髪已に斑白、昔時の態、今一も存する者なし。

○八月、「金華稿刪序」（二・六）を撰した。I三四頁およびIII二〇七頁参照。『金華稿刪』は平野金華の詩文集。南郭

のほか越智雲夢と松平頼寛の序を冠して享保十六年に刊行された。金華は享保十年ごろ刈谷藩を辞して、間をおかず  
に水戸家の支藩磐城守山藩に仕えている。頼寛は守山藩の世子、徂徠を尊崇すること厚く、『護園雑話』に

頼寛侯 松平  
大学頭殿、人ノ来リテ咄ノ時、徂徠ト申セバ、色ヲ正シテ、ソノ方ヲチナド、徂徠ト呼ビズテニイタシテ  
スムベキトテ怒ラレ給シ由。

というエピソードを伝える。後宝暦十年、『論語徵集覧』を刊行する。

○この年、母吟子が七十歳。雲夢が「服母大孺人七十寿序」(『懷仙樓集』九)を贈った。文中、少年時の南郭を励ま  
す母の言葉を伝えること、一四八頁参照。

○この年の作と推定される五律に、「同君嶽翼之集縁山寮舎。得花字。賦呈雲洞師」(二・三)がある。ともに  
有力な門人である君嶽・翼之が初めて登場する。

君嶽は書家松下烏石。姓は葛、また源。名は辰。君嶽は字。この年二十九歳。麻布古川町に住んで、近所にあつた  
烏石からすいしに因んで烏石と号した。後赤羽に住んで居宅を青蘿館と称する。南郭はしばしば青蘿館に遊んだ。『南郭先生文  
集』二編を校合するのは烏石である。三村清三郎氏「松下烏石」(『近世能書伝』所収)に断片的な資料を集める。吉田  
謙斎の『東游隨筆』(秋田県立図書館蔵)から逸話を一条引く。

烏石山人ハ松下清八源君嶽ト云ヘリ、南郭ノ詩会ニ行キシガ、席上ノ諸客ニ云ヒケルハ、諸君ノ詩、李白杜子美ニエラ  
争フ事ナレドモ、筆ヲ紙上ニ落セバ曾ツテ行艸ノ体ヲ弁ヘズ、甚ダ拙キ事ナリト、常々笑ヒケルトゾ。夫ユヘ赤  
羽ノ門下、何レモ書ヲ嗜ミタリト云フ。

赤羽は南郭、享保十五年以降赤羽に住するのでかくいう。

翼之は中野氏、名は羽。幕臣である。翼之の父の墓誌である南郭の「万残君墓碣」(三・八)によれば本姓高木、ゆ

えに南郭等の文集では高翼之と称される。『護園雑話』に逸話を伝える。

高翼之ハ南郭ノ高弟ノ門人也。士寧（鶴殿氏。南郭門人で同じく幕臣）出デラル、前マデハ一人ナリキ。士寧出デラレテ中悪シキユヘ会ニ出デズ。気篤ヤカマシキ人ユヘ皆ソシリタルニ、南郭云ハレシハ、マサカノ時ニラレガ為ニ身ヲ捨ツルモノハ翼之独リ也ト誉メラレタリ。深切ナル人ノ由。

なお右の詩題に見える雲洞は増上寺宝松院六世。号は暁山。南郭と親しく交わった。かつて小石川伝通院にいたころ春台に学び、春台に「暁山上人墓碣」（『紫芝園後稿』一一）がある。

享保十四年 四十七歳

○正月、西帰を計画したか。「答ニ玄海師。其四」（二・九）は、冒頭に「物夫子の逝きしより忽ち復た一年」とあるのでこの月に裁されたものであろうが、末尾に「不佞西帰の計は則ち未し。蓄思の在る所、何の時や言ふべき」という。これより前の享保六年、増上寺の僧素有が京に赴き、南郭に京扇二柄を送ってよこした。それに答えた「答ニ有上人」（初・九）にいう、

法顯、故郷の扇に悲泣す。人情の至る所、已むべからず。乃ち不佞をして一たび此こゝに對して、忽ち復た潜然として郷心に切ならしむるときは、則ち賜と為さんか、賜にあらざると為さんか。

享保十年ごろには在洛の僧了願（履歴未詳）に和して、平安城・比叡山・愛宕山・桂水・鴨水を詠じた五絶「西京五絶。和了願師」（二・五）があるなど、南郭は望郷の念を折にふれ吐露してきたが、この享保十四年のころかなり本気で帰郷を考えていたものか。元禄九年に出府して以来すでに三十三年を経ている。しかし結局南郭の帰郷は、さらに十六年を経た延享二年まで実現されなかった。

ここに面妖なものは、文集の配列から享保十四年ごろの作と推定される七古「難波客舎歌」（二・二）である。

八間楼上南去客 八間楼下北来舟

問君駐舟自何処 東極江都西帝州

問君此去向何処 難波風俗堪社遊 (以下略)

あたかも大阪八軒屋にあって詠ずるかと思わせる。南郭がこのころ大阪に赴いたことは、「断じて」という形容を冠して、ありえない。ならば完全な想像の作と見なすべきなのであろうか。判断を下しかねる。

○春夏の交、平野金華等と鎌倉江島に遊んだ。「与于士朗」(二・九)にその状を報ずる。なお一六一頁参照。

○八月、「草庵集難注序」(二・六)を撰した。『草庵集難注』は、柳沢家時代の友人桜井元茂が香川宣阿の『草庵和歌集蒙求諺解』を批判して著わした書で、南郭の序のほか、柳沢淇園・平君舒の序、谷口元淡の跋を附して、享保十五年十月に刊行された。

文中、南郭は元茂とともに和学に励んだ少年時を追憶する。一八〇頁参照。さらに

生(桜生、元茂を指す)の篠笥しのびに在るに方りて、余適々移居して其の比隣に就く。復た生と飲すること二年所ばか。旦暮を問はず。暁すること往昔に踰えたり。

と、いかなる事情からであらうか、元茂も南郭と同じころ不忍池畔に住したことを述べる。なおこの年ごろの作と推定される七古「月出歌。送桜生還郡山」(二・二)がある。柳沢家は享保九年に甲斐から大和郡山に転封されていた。元茂との交遊はこれ以後詩文の上にはまったく見えなくなる。

○この年、京都の宇野明霞が李攀竜の文集『滄溟先生集』の和刻を企てたらしく、南郭は「重刻滄溟集序」(二・六)を贈って、難解なこの集に施訓する明霞の挙を賛えた。李攀竜の文集の和刻には『補註李滄溟先生文選』があるが、刊年を知らない。ここで「重刻」というのは、右『文選』に対してか。もともと明霞のこの施訓本はついに刊行され

なかった。

田中桐江の甥の田中蘭陵が李氏の尺牘の和刻を図り、同じこの年の秋、南郭はこれにも序を与えた（『滄溟尺牘序』、二・六）。この『滄溟尺牘』は翌享保十五年九月、嵩山房から刊行されている。

○この年、伊藤東涯門下の芥川丹邱に宛てて「報芥子成」（二・九）を裁した。文中、「足下、宋氣（朱子学的思考）の其の心を茅塞することなし」と、その人柄に好感を寄せる。天理図書館蔵『芙蓉館帖』第二巻に、丹邱の南郭に呈した詩稿が収録されている。享保中期から、桐江・若水・宇野兄弟等を介してであろう、護園と上方の文人との文雅の交わりが開けた。I七〇頁参照。

享保十五年 四十八歳

○九月二十日、母吟子が七十二歳で歿した。悼亡の詩文は残されていない。兄元恵と同じく谷中の日蓮宗瑞輪寺に葬った。

○秋、石島筑波に贈った七律「送石仲緑還筑波田廬」（二・四）がある。

憐爾青々客子衿

妙年帰住筑波陰

中原罷去游梁賦

大嶽登臨小魯心

曝麦坐来時雨度

帯経耕処午雲深

主人一送相思否

徧酒聊歌東武吟

筑波が文集に登場する最初である。筑波、名は正漪、字は仲緑。この年二十三歳。浜松藩士であったが、拘束を厭う性格から当路の人と衝突し、脱藩した。このころ南郭の門に帰し、筑波山麓に隠棲して筑波山人と号する。のち江戸に出て駒込に住し、舌耕をもって聞えた。放奔な人柄を伝える逸話を二条、『護園雑話』から引く。

・筑波ハ市川団十郎ト心安シ。或ル時護園社中ノ書ヲ団十郎モライタシトタノミケレバ、早速承知シテ皆己レガ  
質書シテヤリタリ。亦瀬川菊次郎ニモタノマレシ時、カヨウニシテヤリタリ。二人共ニ大ニ喜ビテ、アツク謝礼  
ナゾシタリ。文卿が咄ニハ、慶子中村富十郎が京へ上ル時、春台・南郭ノ筆ニイツワリ、送序ヲ贈リタリ。因テ慶子  
進物ヲ以テ春台へ行タレバ、存ゼヌ事也、ニクキ筑波ガシワザ也ト云シ由。此ノ送序、殊ニ見事ニ出来タリトゾ。  
・同人（筑波）駒込ニテ舌耕シタルニ、書物ハナシ。唐詩選・滄溟尺牘ハ空ニテ説ク。見台ノ上ニハ淨留利本、舛  
草紙ヲノセテ説キタリ。亦諸侯方へ出講スルニ、大ガイ書ハイツモ滄溟尺牘ヲ見台ニノセ、空ニテ講ゼリト恵明  
ヨリキク。

○冬、赤羽に移居した。詳しくは知られないが、現在の港区東麻布のあたりであろう。翌年に裁した「与三独雄師」  
(二・一〇)に、

不佞、往冬、居を赤羽に卜す。地頗る幽僻、前溪後林、稍人や意に可なり。

と満足の意を表している。

○冬、「与三徳夫子和」(二・九)を裁して、春台・金華に師の遺著『弁道』『弁名』を校合せんことを乞うた。南郭は  
但徠の歿後、その文集の整理に当っていたが、多忙で三年の久しきを経て事も事が終らない。せめて二弁の校合は両兄  
に依頼したいとの趣旨である。

元文二年正月の項(一五八頁)に述べるように、『但徠集』の編纂をめぐる南郭に含むところのあった春台は、「報  
子遷書」(『紫芝園後稿』一二)で、きわめて冷淡な返答をした。いわく、足下が先生の遺文を編纂して先生を不朽に  
せんとするのは、その事大であるが、先生の主著は二弁であって、この刊行をまず図るべきである。詩文のごときは  
伝えるのはもとより可であるが、伝えなくとも可である。また足下は二弁の校合を金華と自分に依頼されたが、門下

のうち親しく顧命を受けたのはもともと足下ひとりである。金華は先生に愛されていたから、手伝えば先生も悦ぶであらうが、自分のごときが校合にたずさわるのは先生の遺命にそむく行為であると。『護園雑話』に、

二弁・論語徴ハソラニテ書カレシ文ナレバ、時々覚へ違ヒ有ル也。ヨツテ校正ヲ山井善六（崑崙）ニ頼マレタリ。善六ハ徠翁ニ七日後レテ死セシ人也。業終ラザリシニヨリ、南郭・春台等、是レヲ校正セリ。

と伝える。『護園雑話』は作者未詳であるが、『瀟水雜著』と共通する話題が多く、宇佐美瀟水の談話を主たる資料にしているのと断じて誤りない。その書に右のようからには、結局は春台も校合に参加したのではあるが、春台の冷たい応待は南郭に衝撃を与えたものと思われる。

享保十六年 四十九歳

○正月、『藝園録稿』刊。享保十二年十一月既望付けの平野金華の序によれば、その年宇佐美瀟水が録し、徂徠の養嗣子金谷が校したと。護園一門四十九名の詩の総集で、収録された数は南郭が三十三首で最も多く、以下金華二十九首、山泉周南二十八首、高野蘭亭・鷹見爽鳩ともに十六首、堅卓（一二六頁参照）十四首と続く。春台が七首と少ない理由は、享保十七年冬の項（一四四頁）に述べる。

○春、「答清泰菊禅師」(二・一〇)を裁する。三二二頁参照。そのころ南郭の詩名がすでに高く、詩文の贈答・添削にいとまのなかつたさまを伝える。

○春、滝鶴台が江戸に来た（滝鴻「先考鶴台先生行状」、『鶴台先生遺稿』所収）。鶴台、名は長愷、字は弥八。この年二十三歳。長州の儒医。萩の明倫館で山泉周南に学び、毛利の一族右田毛利家みぎたに仕えていた。同家の世子宗広に伴われての出府であった。翌十七年京都へ向けて去るまで、南郭の門にしばしば遊んだ。もっとも南郭に享保十四年の書牘「答滝弥八」(二・九)があり、書面による交渉はすでに開けていた。南郭や春台の世代が歿してのち、鶴台は宇佐

美瀧水や大内熊耳などともに明和期の徂徠学を担うに至る。

○春夏の交、肥前蓮池の医師江文伯が帰郷するに際して、「送江文伯序」(二・六)を撰した。南郭の文学観を最も雄弁に語る文章である。I二五頁およびIII二〇九頁参照。文集中の配列からすると享保十五年の稿のようにも思われるが、宇野士朗に七絶「送江文伯自武婦肥」二首があつて、『于士朗遺稿』二の七絶部、享保十六年の個所に配列されている。『南郭先生文集』の作品の配列には成稿の順序の乱れが若干見られるので、『于士朗遺稿』に従い、III二〇九頁の頭注を訂正する。江文伯については未詳であるが、大潮の『魯寮詩偈』に七絶「医生江文伯宅际諸子」があるので、蓮池の医師と推定する。

○八月、仙台の新井滄州(名義質、字子敬)が詩を寄せてきた。新井白石との贈答の書翰を収めた『新佐手簡』で知られる佐久間洞巖(名義和、字子巖、別号容軒)の息であるが、出でて新井氏を冒した。

得<sub>二</sub>僊台源子敬詩<sub>一</sub>。其翁書副焉。始通也。乃審。翁嘗与<sub>二</sub>来翁・春叟<sub>一</sub>周旋。即<sub>二</sub>護園集所<sub>一</sub>称子巖先生者也。因和<sub>二</sub>其詩<sub>一</sub>。寄<sub>二</sub>答子敬<sub>一</sub>。

紫府僊台珠樹花 暗投無<sub>レ</sub>惜自<sub>二</sub>天涯<sub>一</sub>

人間久隔三山路 海上翻来八月槎

敢比竜門高二世<sub>一</sub> 方驚孔子本通家

妙齡知爾紅顔子 相照還羞鬢已華 (二・四)

洞巖が正徳五年の徂徠の「送<sub>二</sub>左子巖序<sub>一</sub>」(『徂徠集』二〇)以来途絶えていた護園との交遊を復活させたのは、南郭の詩名を聞き伝えたからであろう。以後兩人の間には書信を通じての交渉が開けた。のち息の滄洲は江戸に出て南郭に入門する。元文元年に洞巖が八十四歳で歿した時、南郭は「容軒先生墓碣」(三・八)を撰した。

○有力な門人の一人である莊田豊城の名が、この年ごろから文集に登場する。七絶「小集。莊子謙病而不<sub>レ</sub>至。贈<sub>二</sub>酒及詩簡<sub>一</sub>。席上諸子因和却寄」(二・五)を、集中の配列によってこの年の詠と推定する。

知君伏<sub>レ</sub>枕長卿才 忽贈<sub>二</sub>芝樽<sub>一</sub>對<sub>レ</sub>客開

更為<sub>二</sub>病來仍作<sub>レ</sub>賦 還疑酒自<sub>二</sub>当墟<sub>一</sub>來

豊城、名は允益、字は子謙。この年三十五歳。豊後臼杵の人。本藩に仕えた。『豊城詩集』一冊が写本で早大図書館服部文庫に蔵される。

享保十七年 五十歳

○七月二十三日、平野金華が歿した。享年四十五。南郭に五律「感<sub>レ</sub>秋子和新喪」(二・三)七律「哭<sub>二</sub>平子和<sub>一</sub>。三首」

(二・四)「文莊先生墓碣」(二・八)がある。莫逆の友を喪って、哀惜の情は痛々しいばかりである。

感<sub>レ</sub>秋 子和  
新喪

未<sub>レ</sub>期<sub>二</sub>揺落候<sub>一</sub> 先<sub>レ</sub>慘<sub>二</sub>變衰秋<sub>一</sub>

酒有<sub>二</sub>山河感<sub>一</sub> 歌添<sub>二</sub>薤露愁<sub>一</sub>

此生傷<sub>二</sub>白髮<sub>一</sub> 何処問<sub>二</sub>滄洲<sub>一</sub>

蕭颯淒風色 空余桂樹幽

○八月、『弇州明詩評』(内題「王弇州明詩評」)が日本橋通二丁目戸倉屋喜兵衛から刊行された。王世貞が明の古文辞派の詩人多数の履歴を編集し、短評を加えた書である。同じ八月付けの南郭の序「題<sub>二</sub>明詩評首<sub>一</sub>」(二・八)を有する。それによれば施訓は滝鶴台の手にかかる。柳沢淇園に宛てた「答<sub>二</sub>郡山柳大夫<sub>一</sub>」(二・一〇、I一八三頁参照)は、文中に「新刻明詩評、謹んで左右に貢す」との一節があって、このころ裁されたと知られる。

○九月、「五七絶句解序」(二・七)を撰した。この序を冠した但徠の『絶句解』の版本は、普通に見うるものでは延享三年版が最も早い。しかし続編である『絶句解拾遺』に享保十八年版があるので、本書にも享保十七年あるいは十八年の版が存するものと推測される。

○同じ九月、本多猪蘭の文集『猪蘭台集』初稿に序を寄せた(『猪蘭台集序』、二・七)。

○冬、『護園録稿』をめぐるって太宰春台との間に激しい論争を展開した。論争というのはあるいは不正確な表現で、実態は、春台が感情にかられた攻撃を加え、南郭がやや迷惑げに受けて立つというものであった。

まず十月二十九日付けで春台が「書護園録稿後」(『紫芝園後稿』一〇)を著わした。いう、享保十二年冬、但徠先生が宇佐美瀧水に門人の詩を輯録させた折、自分は詩を呈することを固辞した。最近『護園録稿』が刊行されたことを知り、高野蘭亭の許で閲すると、自分に断りなく未熟で誤りの多い自分の詩が採られている。仔細に検すれば、他の人々の詩にも平仄・造語の誤り等の疎漏がすこぶる多い。これは蘭亭も同意見である。先生は瀧水に輯録を命じてすぐ歿したから、輯録の結果に先生はあずかっっていないのに、かく杜撰なものを先生の遺志であるかのごとくにして刊行するのは、先生の名を恥ずかしめる行為である。自分の見るところ、集中、犯律(平仄の違反)二種三十七例・誤韻三例・失韻一例・乱韻一例・平仄誤用十五例・造語不适当五例・誤写十三例・闕文一例があると。

『紫芝園後稿』によれば以上の通りであるが、早大服部文庫蔵写本『書護園録稿後』所収のテキストには、「十月廿九日」の日付けが明示されており、かつ末尾に右の犯律三十七例以下の疎漏をすべて具体的に列挙してある。この疎漏のリストを公刊しようと思うがどうかと問う春台の書翰がリストとともに南郭に届けられたらしく、南郭は十一月十六日付けで春台宛ての返翰を發した。『護園録稿』刊行の直接の責任者ではない南郭に春台がこのような不満をぶつけ、嫌味まじりではあるにせよリスト公刊の許諾を求めたのは、但徠歿後、護園の文学面を管理するのは南郭で

あるとする認識が門下の間に行き渡っていたためであろう。

南郭の返翰は、犯律については古人にも希れに例ありとしながらも春台の指摘を認め、失韻と平仄誤用のうち二例は春台を駁し、造語不適當は古人にも間々有ること弁解し、残りの誤韻・乱韻・平仄誤用十三例、誤写・闕文には言及しない。言及しないのは、誤写・闕文は弁解しようのないものであるから、他も同様であったのであろう。最後に南郭は次のようにいう、

来翁病中、此選之趣一二物語承候所、由来磊落之先生故、皮相を略候所見と相見候得ば、今以存生に候とも右之疎漏は不必拘に可有御座一と致推察候。然ば後人我輩之分には、俗難可有之、疎謬は回護可仕本意に候以上、足下此挙、一々以法被正候上は、異議有間敷事に御座候。（疎漏のリストの）刊行之議は附刻にても別刻にても御勝手次第可被仰付候。

右の返翰を受けて、春台は十一月二十三日付けで再び南郭に宛てて、四百字詰めに直せば十二枚に及ぶ長文の書翰を發した。これは春台の愚直で偏執的な性格と、被害者意識むき出しの正義感をあますところなく伝える、彼の面目の躍如たる文章であった。謹直な書体の真蹟が『芙蓉館帖』第一巻に収められていて、珍重するに足りる。まず七月に歿した平野金華の嗣子彦次郎が跡目相続し、南郭の門下に列したことにつき、

金華、平日足下をば泰山北斗と仰ぎ、徂徠をも足下之御弟子に致度きほどの所存にて候へば、此度彦次郎を御門下に列し候事、さぞ大慶に可有之と拙者も珍重に存候。

と嫌味たらしく祝福する。ついで右の返翰で南郭が古人にも用例ありとした事項について、「乍御六ヶ敷御指示可有被下候。晩学仕度候」などという言い回しで具体例を示せと迫る。さらに南郭の、徂徠は磊落の人ゆえ「今以て存生に候とも右之疎漏は不必拘に可有御座一と致推察候」という言に、書翰の後半すべてを費して激しく駁論する。

先生磊落之人にて皮相を被<sub>レ</sub>略候と被<sub>レ</sub>仰候段、愚拙不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候。……孔子は聖人にて御座候へば、万徳円満之内に定て磊落之徳も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候へ共、一途に先王之道を守給ひ、人にも忠信礼讓のみを御教候と見え申候。後世之詞人にも、晋の阮籍嵇康等は極て磊落の人にて、放逸無慚の乱人にて候へ共、作り候詩に韻を叶へぬ事は無<sub>レ</sub>之候。唐之詩人にも李白などは磊落奇偉之人にて、殊に酒徒にて候へ共、酩酊沈醉之内に作り候詩にも、法律を犯し平仄を誤用候事は無<sub>レ</sub>之見え申候。……

凡唐詩は法律にて貴く、法律にて勝れ候と愚意には存候。法律を守まじく候はゞ、唐詩を作事不<sub>レ</sub>入事に候。……録稿の如く、法律の正からず、誤韻・乱韻之類をも載候て皮相を略すと被<sub>レ</sub>仰候はゞ、唐詩之法は烏有にて候。

……唐詩之法律は……上も下も一同に是を遵行し、宋元明、今の世迄も天下公共に守候所を見候へば、大方人間の三綱五常之如くなる物と見え申候。然者三綱五常を欠候ては人に非ず、法律を破候ては唐詩に非ずと愚意には存候故、平生人の詩を見候にも、先づ法律を致<sub>二</sub>吟味<sub>一</sub>候。……

法律を守候を六かしく思候磊落之士は、只いつも古詩樂府歌謡之類<sub>ばかり</sub>斗を作候て一生を送候事、快活にて可<sub>レ</sub>有候。将<sub>また</sub>又足下には俗難をも回護可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成と思召候由、御尤に候。俗難とは拙者の申候不審共を指て被<sub>レ</sub>仰候と聞え申候。愚存は右に申候通に候へば、足下の磊落にては、我等如き碌々の者の難じ候事を俗難と被<sub>レ</sub>仰候事、至極御尤に御座候間、俗となり共愚となり共、牛とも馬とも可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰候。……

さらにこの春台の長文の書翰に答えた月日未詳の南郭の返翰がある。春台の要求に従つて、彼の犯律等とする用法が古人の作中に見出される例を若干挙げるが、皮相俗難をめぐる春台の論難については、

皮相俗難等之事申送候処、如何御聞被<sub>レ</sub>成候哉、拙者申陳候所存とは相違、御詰難之趣、不<sub>二</sub>存寄<sub>一</sub>事御座候。定て拙筆文意不如意、致<sub>二</sub>失誤<sub>一</sub>候哉と不堪<sub>二</sub>愧汗<sub>一</sub>候。然ば右之趣御反答仕候共、又々疎拙之筆にて愚意不分明候

はゞ、再応御疑を可<sub>レ</sub>生候。とても筆紙には難<sub>ニ</sub>申尽<sub>ニ</sub>候故、重て期<sub>ニ</sub>寛話之節<sub>ニ</sub>面罄可<sub>レ</sub>仕候。と体をかかず。到底つき合いきれないという心境であつたであらう。

早大図書館服部文庫蔵『書叢園録稿後』は右の四点の文章を収録した写本であつて、服部匡延氏「服部南郭資料」に翻刻されている。なお十一月十六日付け南郭の書翰と十一月二十三日付け春台の書翰とは早くから有名であつたらしく、二通一組の写本が他にもいくつか残っている。『南郭往来』と題する内閣文庫蔵の写本は、「天明八戊申十二月稲垣源五郎よりかり受候而写竟」とある識語を有する。稲垣源五郎は春台の門人稲垣白巖の養子東山のことであるから、二通の書翰が両先生激闘の跡として叢園末流の間でひそかに流布していたさまをしのばせる。

『叢園録稿』の「疎漏」に端を発する春台・南郭の衝突は、徂徠歿後の徂徠学が兩人をそれぞれの代表としつつ経学と詩文とに分裂してゆく趨勢を象徴する。南郭はすでに詩文をもって門戸を張っている。性情の自由を尊重する生き方の原則が、時には詩律にもこだわらない態度として表われた。徂徠の経済の志を継承したと自負する春台にしてみれば、詩文に遊んで先王安天下の道を顧みない南郭が天下に赫赫たる名声を獲得しつつある現状は、先師の道を歪曲するものとして憤激に堪えないところであつたであらう。春台の論難は、詩律の遵守の主張の形をとつてはいるものの、南郭が何気なく用いた「磊落」の語に執拗にこだわり、すべての批判がここに帰していることが示すように、一生を決活に送る南郭の生き方に対する反撥が根底にある。しかしか春台が憤激しようと、経済に関心を向けない詩酒風流の文人意識が、南郭を有力な先達の一人として滔々と広まってゆく時代の趨勢は、如何ともしがたかつたのである。

享保十八年 五十一歳

○三月、五律「暮春送<sub>ニ</sub>吳岑・天年<sub>ニ</sub>禅婦<sub>ニ</sub>勢州<sub>一</sub>。分得<sub>ニ</sub>南字<sub>ニ</sub>」(二・三)がある。吳岑、正しくは悟心。名は元明、号

は一雨。天年、名は淨寿、号は終南、また介石。ともに伊勢の黄髮僧。詩を南郭に学び、篆刻にもすぐれ、後京都に住んだこと、すべてともにする（三村清三郎「伊勢と篆刻家(五)」、「書苑」第四卷第一号）。

○春、益田鶴楼を訪れた。

飲<sub>二</sub>鶴楼主人<sub>一</sub>得<sub>二</sub>西字<sub>一</sub>

市朝尋<sub>レ</sub>隠此相携　不<sub>レ</sub>比桃源使<sub>二</sub>客迷<sub>一</sub>

天指<sub>二</sub>高楼<sub>一</sub>黄鶴舞　傍臨<sub>二</sub>大道<sub>一</sub>紫驪嘶

彩雲虹度連<sub>二</sub>橋北<sub>一</sub>　白日晴分敵<sub>二</sub>関西<sub>一</sub>

誰識壺公無<sub>レ</sub>尽酒　櫻家容<sub>レ</sub>坐醉如<sub>レ</sub>泥　（二・四）

鶴楼、名は助、字は伯隣。本町四丁目で五雲香なる眼薬を代々販売する薬商の主人である。新井白石門下で、護園の成鳥道筑・高野蘭亭と詩をもって交わり、兩人を介して南郭と相識った。後に南郭は『鶴楼先生遺編』（宝暦十二年刊）のために「鶴楼伝」（三・七）を著わし、

学を好むと称すると雖も、また且つ屑屑として儒士の状を為すことを欲せず。則ち曰ふ、一売薬翁。……諸君子、唯以て与に酒を飲むべきのみと。

と、酒を愛し客を喜ぶその人柄を伝える。徂徠一門と木門の新井白石・室鳩巢等との間柄は必ずしもよくなかったが、南郭・道筑・蘭亭が鶴楼と交わったことは、文業が学統の意識に縛られる儒業から独立して、近世人士の文化的営為として定着しつつあることを物語る。

○八月、『唐詩品彙』の五七言絶句部を嵩山房から校刊した。小本三冊。第一冊が五絶、第二・三が七絶。南郭はすでに享保九年に『唐詩選』を校刊しているが、それより本格的な唐詩の総集の校訂を志したのであろう。なお早大図

書館服部文庫蔵の『唐詩品彙』は、通行の小本と同じ板木を用いながら、天の余白を大きくとって縦長の唐本様に製してある。配り本としてこの型のものを小部数特別に製本したものと思われる。

○この年の詩二首を録する。

春思

高楼日永酒初醒　　水送斜陽滿晚汀

江上人婦春不<sub>レ</sub>管　　長堤楊柳自青々　　（二・五）

江村晚眺

水煙秋渚近　　江樹晚村孤

返照分<sub>レ</sub>湖平　　殘雪掃<sub>レ</sub>海無

扁舟遇<sub>ニ</sub>漁釣<sub>一</sub>　　一曲入<sub>ニ</sub>孤芦<sub>一</sub>

看羨売<sub>レ</sub>魚去　　生涯向<sub>ニ</sub>酒壚<sub>一</sub>　　（二・三）

○この年か、後に養嗣子となる中西仲英が入門して来た。仲英は字、名は宣雄、服部家に入ってから元雄と改める。号は白賁。字をもって行われる。その「復<sub>ニ</sub>松叔豹<sub>一</sub>書」（『踏海集』八）にいう、

雄、少くして親を辞して国を去り、今の翁（南郭）に仕ふ。翁の我を祝ること猶ほ子のごとし。我もまた未だ嘗て翁を祝ること猶ほ父のごとくせずんばあらざること、玆に二十余年なり。

と。この文章は、「自ら計るに齡纔かに四十に過ぐ」とあって、仲英四十歳の宝暦三年ごろ裁されたものであるから、入門の時期を宝暦三年から二十年前のこの年にしばらくかける。この年、仲英二十歳。

仲英の父は中西平次右衛門と云って、摂津の西宮神社の祝人（下級神官）であったが、仲英の生まれた翌年の正徳

四年、西宮神社の内紛に連座して西宮を追放された。事件は新井白石の『折たく柴の記』下にも書き留められている。正徳三年、西宮神社の社家・祝人数人が連名で神祇伯白川中将に神主吉井宮内の罪状を訴え、中将が吉井宮内を罷免した。四年春、宮内が幕府に訴えて再審の結果、非は先の社家・祝人の方にあるということになって、それぞれ処罰され、宮内は復職した。仲英の父はこの時処罰された祝人の中の一人である。現在西宮神社にこの一件の処分記録である「申渡之覚」なる文書が保存されている。うち中西平次右衛門に関する部分を翻刻する。

西宮社願人今は主税と申す

中西平次右衛門

右平次右衛門事、去年三月白川中将家におゐて其神主の罪条五ヶ条をしるし出し、其後中将使者として白井左忠西宮に下向の時、社家の輩と連名し、神主罪状を執筆の事度々に及び、此事によりて中将沙汰として神主祝部等其罪に行はれ訖ぬ。依<sub>レ</sub>之神主吉井宮内愁訴の事に就き、奉行所におゐて彼罪状を糺明あるに及び、一事として其証とすべき事あらず。今に至ては申披くに詞なき由を申す。当社の社家願人等の事、其品同じかるべからざる由は、貞享年中奉行所におゐて其定有<sub>レ</sub>之処に、みだりに社家の輩と連名し、就<sub>レ</sub>中非分非職の召名装束等の事、其憚をかへりみず、罪科重畳に至る。雖<sub>レ</sub>然寛容の沙汰によりて其罪を減じ、これを追放せしむる者也。

午五月

西宮を追放された中西一家は、仲英のもの心ついたころ、享保十年ごろからは撰津池田に住んでいたらしい。『葎園雑話』に「服仲英、モトハ富春叟（田中桐江）ノ門人ニテ……」と伝えるが、池田の田中桐江の呉江社に学んだ荒木蘭臯に七古「送<sub>三</sub>西仲英之<sub>三</sub>江都<sub>二</sub>」（『鶏肋集』三）があるのは、仲英も桐江門にあつたがゆえの送行であろう。仲英が出府して南郭の門を叩いたのは、桐江の勧めによるものか。後の元文四年冬、仲英は親を帰省するためいったん江

戸を去った。莊田豊城の『豊城詩集』(早大図書館服部文庫蔵) 一に、これを送った七古「送西仲英婦<sup>三</sup>省呉織里<sup>二</sup>」があつて、仲英の家族が呉織里<sup>くわいはら</sup>に池田に住んでいたことが知られる。南郭の次男惟恭が婦省中の仲英をしのんで作った五絶を「寄懐仲英。時在米花谷<sup>二</sup>」(『鍾情集』)と題するが、米花谷とは現在のどこに当るのであろうか。あるいは単に「米花<sup>二</sup>糝」に池田の酒造りの意を寓したものが。

『芙蓉館服部氏系図』によれば、仲英には応助なる兄がいる。I一八六頁参照。あるいはこれは弟の誤りであるかも知れない。というのは、細合半齋に「与服赤羽書」(『遠志初篋』二)なる一文あつて(服赤羽は仲英を指す)、「中西君は先生の令弟なることを聞く」という。仲英には上方に住して半齋と交遊のある弟のあつたことが知られる。

仲英の東遊は、本来は学問修行のためものではなかつたらしい。『護園雑話』に次のように伝える。

文仲(安達清河)ニ聞キタレバ、仲英ガ親ハモト神主カ公家ノ雜掌ニテアリシガ、訴訟ノ事ニテ御構ニアヒタリ。仲英、出府シテ御託ビ申シ、若シ聞キウケナクバ踏<sup>レ</sup>海而死トテ江戸へ出デ、トウ<sup>レ</sup>御託ビ叶ヒテ父赦ニ逢ハレタリ。

享保十九年 五十二歳

○三月、『文筌小言』を京都の須原屋平左衛門から刊行した。半紙本一冊。跋者は松下烏石。村山吉広氏「服部南郭の『文筌小言』」(『中国古典研究』第一六号)に紹介がある。助辞に関する見解を述べた書で、明の盧允武の『助語辞』(延宝二年和刻)、およびその書に追隨する本邦人の助辞研究の風潮を否定し、助辞は実際の文章の中にあるままの生きた機能を把握すべきであつて、一つ一つを取り出して辞書的に理解することは無意味であると説く。大尾に「享保十九年二月著」と記すが、『南郭先生燈下書』に、

前々助語の心得に書き捨て候もの弟子衆の方に有<sup>レ</sup>之候間、取出し御目に懸くべく候。

との一章があるから、少なくとも骨子は享保十年成稿の『燈下書』に先立って成立していたものと思われる。

○九月、『南郭先生燈下書』を京都の丸屋市兵衛から刊行した。享保十七年に医学修業のため江戸から京都へ移っていた滝鶴台の、十八年春付けの序を冠する。一二九頁参照。余談ながら、宝暦ごろ京都刊の洒落本『原柳巷花語』巻末の「新刊嗣出目次」に、「西郭先生蕩家書」なる一書が挙がる。もとより本書の題名をもじった書であるが、刊行されたかどうか未詳。

○この年、仙台の佐久間洞巖が画を贈ってきた。七古「得<sub>レ</sub>僊台佐容翁画。喜而作<sub>レ</sub>歌寄贈為<sub>レ</sub>謝」(二・二二)があって、冒頭の一句に「僊台の僊翁八十二」と。洞巖八十二歳はこの年である。洞巖は祇園南海や彭城百川に先行する文人画家でもあった。『南画研究』第一巻第八号に松下英歴氏蔵の洞巖宛南郭の国字牘の写真を掲出し、「李雲山客」氏の解説に、南郭も画を嗜んだから、兩人の間には画事をめぐる交渉があったかと推測する。

かつて柳沢吉保に召抱えられた際の南郭の二つの芸、歌と画のうちの、画についてここで触れておくと、南郭の画の現存するものとしては、『南画研究』の右の号に写真版の掲出される相見香雨氏蔵「採蓮図」と、服部元義氏蔵「山水図」(『江戸時代図誌・江戸二』に写真掲出)と、やや特殊なものであるが『護園雑話』にも南郭がそれを画いたことの見えている白描「三十三観音図」(早稲田大学図書館蔵)としか私は知らない。しかし晩年には居室の四壁に山水を画いて楽しんだし(一三七頁参照)、越智雲夢の「与<sub>三</sub>子式。其一」(『懷仙樓集』一〇)には、

子遷先生、予の為に雪中白鷺の画を製す。一足を挙して寒樹に宿するの状、宛然として生けるが如し。

といい、また大内熊耳の「題<sub>三</sub>南郭先生画<sub>レ</sub>馬図二」(『熊耳先生文集』一二)などと知友の言が残るから、画事は終生の趣味だったのであろう。相見氏「服部南郭の画事」(『南画研究』同右)は、右「採蓮図」に現われた南郭の伎倆を贅え、「それは何といつても、子供の時から鍛え込んだ用筆の素養の深さが然からしめたところであらう。この点で

は、南海が大体に余技的で、往々にしてアマチュア臭のあるを免れないようなものとは異なるものである」と評される。

享保二十年 五十三歳

○冬、摂津池田に隠棲中の田中桐江のために「樵漁余適序」(二・七)を撰した。桐江の門人の口を借りて、

散髪野服、起臥猶ほ一劍有るのみ。吾が夫子既已に儒に<sup>あらず</sup>、墨に<sup>あらず</sup>。劍を説けども俠に<sup>あらず</sup>。禪を説けども僧に<sup>あらず</sup>。波流を為すか、弟靡を為すか。

と、規矩に拘わらないその自在の境涯を贅える。桐江時に六十八歳。桐江の文集『樵漁余適』がこの序を冠して刊行されるのは、六年後の寛保元年である。

○十二月二十三日、書家細井広沢が七十八歳で歿した。広沢は徂徠・南郭等より早く元禄四年に柳沢吉保に出仕して、扶持二百石を与えられたが、元禄十五年ごろ致仕した。『楽只堂年録』では元禄十五年正月十八日の歌会以後その名を見なくなるから、この年の致仕と推定する。三村清三郎氏「細井広沢」(『近世能書伝』所収)では何によったか、享保十五年五月二十九日致仕とするが、享保は元禄の誤りでなければならぬ。『南郭先生文集』には、広沢の名は寛保年間成稿と推定される「跋三広沢書巻」(三・九、著述目録類に見える広沢の法帖『八仙歌』の跋か)にしか登場しないが、その文中、

(吉保のもとで)文雅を以て忘年の交を受く。後、後先各々藩を去り、中間三十年、奔走の<sup>いとま</sup>違<sup>あ</sup>らざる、相ひ見ることを得ず。……此より前十年、忽ち草廬を訪はる。曰く、吾老いたり。幾ばくも故人を見じ。故に来り見るのみと。

とあって、柳沢家以来の交誼は保たれていた。

『芙蓉館帖』第二卷に、徂徠歿後の某年、広沢が南郭に薬用熨斗の送呈かたがたその用法を教えた書翰が収録される。

服部小右衛門様

細井二郎大夫

先回は久々に而得ニ貴意、大幸奉レ存候。御清福御座候半奉レ存候。私事老境一日く々と涉ニ光陰ニ候。然ば熨斗一作レ之候。風吹候時は出来兼候。乾き過、致ニ碎壊ニ候ものにて御座候。もはや少も御氣遣なく御用可レ被レ成候。植も入候へば、破申事無レ之候。とかく長命ならぬは功も名も立不レ申候。徂老先生も御短命、惜しき事に御座候。私など比類なれども、少も存生いたし候へば、豚児のためにも成候。此間口苦く、手痛さまざまにて不安心候。与レ風□□□□可レ得ニ貴意ニ候。以上

五月十三日

伏竜肝熨斗

一 艾かくのごとくに入候て火を付る。先艾少斗を以入て底をあたくめ、其後如レ此に艾を満る也。

一 火気うすく成候時箸を以かきおこし、吹候へば、又ほこり申候。其時指頭にておしつけ顛倒して、火の落散ざるやうにして用ゆ。惣じて火を付候ては、顛倒して試て後用ゆ。

一 脣をあつく作る事は、指頭あつからざらん為也。

一 臍中・中腕・下腕・気海・丹田も心まかせに熨レ之候。

一 もし火ぬるく候はゞ、空を刀にて御まし可レ被レ成候。大かた是にてよく可有レ之候。

玉川老人識

元文元年 五十四歳

○夏、撰津池田の荒木蘭臯が東下して南郭を訪れた。蘭臯の文集『鶏肋集』八に七絶「東遊。將<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>南郭先生<sub>一</sub>。因作而呈<sub>二</sub>桐江先生<sub>一</sub>」がある。同じく七絶「墨水泛舟」に頭注あって、「南郭重圈して因りて江南の才子と称すと云ふ」と見えるので、南郭に面会していることは確かである。呉江社の歳旦詩集『呉江水韻』の享保二十年歳晚・元文元年歳首の冊に、蘭臯の七古「早春。預思<sub>二</sub>武陵遊時之事<sub>一</sub>」があつて、東遊のこの年であることが知られる。

『南郭先生文集』に蘭臯は登場しない。南郭の詩名を慕つて、蘭臯のように訪問して来たり、書面を寄せて来たりする者は多かつたに相違ないが、それらのすべてが『南郭先生文集』に見えるわけではない。南郭の詩名の高さをうかがうためだけでなく、直接の師弟関係や学統を超えた文雅の交わりが形成されてゆく過程を見るためにも、南郭と詩文の贈答を行なつた文人を知らなければならぬのであるが、その際、文集に登場して来ない者の調査が厄介な問題となる。管見に入つたのはほんの数名に過ぎないが、便宜上ここに掲げる。

細合半齋 『小草初篋』五に五律「贈<sub>二</sub>南郭赤羽<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>」がある。半齋の東遊は宝曆七年。

北山七僧居士 『北山詩草』に七律「謁<sub>二</sub>南郭服先生<sub>一</sub>」がある。

金竜道人 芥川丹邱の『薔薇館集』に序して、「予昔東都にあり、服子遷・高子式輩と善し」という。同人の

『鶴書楼法帖』にも南郭の贈詩を録する。

清田儋叟 『芙蓉館帖』第二卷に南郭に呈した詩稿を収める。

玩世道人 芥川丹邱が『勢陽風雅』に序して、「抑々吾聞く、上人江都に在りて……南郭・蘭亭二先生に従遊し、最も詩賦を善くす」という。

栗柯亭木端 『狂歌生駒山』哀傷に「東武南郭先生の遠行をいたみて氏を服部といへば ことの葉の匂ひをあとに残しをきて煙の草と成りし服部」の詠がある。

加賀美桜塙 青年時の山県大弐の師。『峽中詩藪』のその項に「少き時東遊し、一たび服南郭の詩社に参ず」とある。

竹内玄閑 履歴未詳。四天王寺女子大学図書館蔵『諸名家書翰』にこの人に宛てた南郭の書翰を収める。その一節にいう、

前日佳稿一覽、返上候処、相違候段被<sub>レ</sub>仰候。御念入之儀、致<sub>ニ</sub>承知<sub>一</sub>候。又々佳稿一通被<sub>レ</sub>遣、不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>閑隙<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>檢閱<sub>一</sub>候。且又画賛之事被<sub>レ</sub>仰下、近年手痛、写字之儀一向相停、何方も固断申述候。

○冬、「題明七才子七律新刻」(二・八)を撰した。松下烏石の校訂した『明七才子詩』に与えた序である。書物は翌元文二年五月、京都の山口茂兵衛等三肆から、他に万庵の序を冠して刊行された。事情は詳らかにしないが、烏石は万庵ときわめて親しかった。この書は宇都宮遯庵跋の大本二冊『皇明七才詩集註解』(元禄二年跋刊)の註を削除して、本文のみを小本一冊に収めたものである。すなわち南郭が大本『唐詩訓解』の注を削除して小本『唐詩選』を刊行した故智にならう。この後の明七才子詩集重視の風潮(工一四頁参照)の嚆矢をなす書物であった。

○湯浅常山がこのころすでに入門している。彼の名の初出する七律「近得湯之祥詩草。開<sub>レ</sub>卷刮<sub>レ</sub>目。末載<sub>ニ</sub>春日即事<sub>一</sub>。因和<sub>ニ</sub>其作<sub>一</sub>附還」(二・四)は、元文初年の作である。『南郭先生文集』の二編終りと三編初めの七律は配列が若干乱れていて、これをこの年の作と断定はできないが、しばらくここにかける。入門はこの数年前であろう。

常山、名は元禎、字は之祥。岡山藩士。元文元年に二十九歳。之祥の字を与えたのは南郭である(「湯生字之祥説」、二・七)。戦国武将の逸話を集めた『常山紀談』の撰者として知られる。親しく見聞した護園諸子の言行を記録した『文会雜記』は、南郭に関する話題に富んで貴重な資料となる。なお三浦叶氏「湯浅常山(一)〜(二)」(『東洋文化』第二二八〜二三二号)がある。

京都の医師畑鶴南の日記『不如学齋劄記』の天保十年二月二十四日条に南郭の常山宛て書翰を載せるが、文中、『徂徠集』編纂の最中であることを報ずる。『徂徠集』は元文二年正月の刊行であるから、それより数年前の書翰であらうが、便宜ここに掲げる(多治比郁夫氏「畑柳平の『不如学齋劄記』に翻刻。『大阪府立図書館紀要』第五号)。

一、前書蒙<sub>レ</sub>仰候来翁遺稿之事、只今最中致<sub>レ</sub>吟味<sub>二</sub>候。考閱相濟次第、上木可<sub>レ</sub>申付<sub>二</sub>積りに御座候。来翁生平反古之まま被<sub>レ</sub>放置<sub>二</sub>候故、下清書に殊外手間取候。右之儀に而、遠所に有<sub>レ</sub>之御稿も取集比校仕候躰故、只今にては一<sub>レ</sub>通も他に出し難き勢に御座候間、不<sub>レ</sub>応<sub>二</sub>御懇求<sub>二</sub>候。

一、拙又初編之後の著作共、御覽被<sub>レ</sub>成度旨相心得申候。只今写字生達暇無<sub>レ</sub>之候故、今少閑時之節頼<sub>レ</sub>而、一兩首も可<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>御目<sub>二</sub>候。

一、拙作快哉亭記に「莫所」と有<sub>レ</sub>之候字、出所御不審之趣、成程好き御心付にて御座候。莫無靡罔微末等、古字通斗に候得ば出所も適々可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得共、奇観も無<sub>レ</sub>之所え僻用候事は悪布御座候。事に<sub>レ</sub>追而改させ可<sub>レ</sub>申候。

一、物先生書法、いづれを字被<sub>レ</sub>申候とも無<sub>レ</sub>之、古帖扱彼は見被<sub>レ</sub>申候而、自己之家に罷成候而御座候。宗法の筆意をよく解被<sub>レ</sub>申候故、和氣も無<sub>二</sub>御座<sub>二</sub>候。

一、拙書之義御尋、壮年<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>于今<sub>二</sub>曾而書学不<sub>レ</sub>仕候故、随分悪筆、中々御答可<sub>レ</sub>仕程之事も無<sub>二</sub>御座<sub>二</sub>候。閑余も候はば少々古人筆跡書習見申度志も有<sub>レ</sub>之候得共、眼前之事に取紛、未<sub>レ</sub>果候得ば、此後も悪筆に而終<sub>レ</sub>世候に而可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御座<sub>二</sub>候。諸方往復の書共数多堆積、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>具披<sub>二</sub>候。猶期<sub>二</sub>後便<sub>二</sub>候。恐惶頓首

四月十日

服部小右衛門

元喬

湯浅本三郎様

『徂徠集』や『南郭先生文集』二編に収められるべき詩文を、常山が早く見たがったこと、徂徠・南郭の書法のことなどが知られて興味深い。文中にいう「快哉亭記」は初・六に見える。徂徠門下の住江滄浪が郷里肥後の邸内に建てた快哉亭について、絵図をもとにその形勝を述べた文章。終り近くに「蓋当今天下之殿、莫所不瞻」の一節がある。

元文二年 五十五歳

○正月、南郭の編纂した『徂徠集』詩・文部十九卷が本多猗蘭の序を冠して、江戸の書肆富士屋三右衛門・大和屋孫兵衛から刊行された。

『徂徠集』の編纂をめぐる南郭・春台の対立をここでまとめておく。徂徠が宇野士朗に与えた「贈于季子二序」(『徂徠集』一一)は京都の儒者をさまざまに批判して、京儒が舌耕で生計を立てていることにも言及する。早く享保十三年、春台は南郭に「与于子遷」書。其三(『紫芝園後稿』一二)を贈り、これに対して

今、書生と為りて斗升の禄なければ、則ちまた舌耕筆耕、唯其の為す所、何の不可なることか之有らん。先生何ぞ独り之を悪むや。

と駁論を加えた。春台は「与于会夫兄弟書」(『後稿』一三)でも舌耕を肯定する論を張っており、当時禄を離れて舌耕で生計を立てていた彼は徂徠のこの文章にはなほだ不満であった。すなわち南郭に与えた右の書牋は、京儒を批判するに急なあまり暴論を展開した「贈于季子序」を、先師の名譽を守るため『徂徠集』から省くよう、先師の文集の編纂にこのころ着手した南郭に勧める意図を持つものであったと思われる。

南郭は「答于徳夫」(二・九)を裁して、先生の文章は舌耕そのものを問題にしたのではなく、京儒が生計に汲汲と

して思考が小さくなり、小成に安んじて安天下の道を思わない傾向を批判するところに意があるのであると述べて、春台の意見を却けた。これが春台と南郭の対立の最初の表面化であって、享保十五年冬の「報子遷書」で春台が南郭の『徂徠集』編纂に冷淡な態度を示した背景には、右のようないきさつがあった（一四〇頁参照）。

この年元文二年の冬、春台は南郭に「与子遷書 其四」（後稿「二」）を送った。刊行された徂徠の詩集に貴人の序がないことについて、伊藤東涯の『紹述先生文集』に内大臣花山院常雅が序を与え、朱舜水の『舜水道文』を水戸光圀・綱条父子が門人を名乗って編纂したことと対比して不満を述べ、先師生前の声望を傷つけるものであると責めて、山県周南も同意見であるといつげ加えた書牘である。翌三年春の南郭の返書「報徳夫二（三・一〇）」は、前の版行は書肆に督促されて再校に及ばなかったものであり、二年春には本多猶蘭の序を冠した版を刊行していると弁解する。

この問題に触れた服部匡延氏「服部南郭漢文墨蹟二点」（『早稲田大学図書館紀要』第八号）によれば、『徂徠集』はまず享保二十年に本多猶蘭の序のない詩部七巻が富士屋・大和屋から刊行され、ついで元文二年正月、猶蘭の序を冠して詩・文部十九巻が同じ書肆から刊行され、最後に元文五年四月、巻二十から巻三十までの書部が谷村豊左衛門から刊行された。この時、前の十九巻の板株も谷村に移ったものと思われる。「与子遷書 其四」を裁した時の春台は猶蘭の序を有する元文二年正月版『徂徠集』をまだ見ておらず、享保二十年刊の詩部だけの版を問題にしたのであった。

この無序の享保二十年版『徂徠集』はまだ寓目することを得ない。おそらくは稀覯に属する書物である。元文二年正月刊の有序版をその年の冬まで春台が見ていなかったというのは不審で、南郭は刷り上った『徂徠集』を書肆に命じて兄弟弟子たちに配らせることをしなかったのであろうか。春台の不満は序の有無の一件にとどまらず、『徂徠集』

の校合ぶりにまで及んだ。知人某に宛てた書翰（松林桂月「古名家の尺牘」、『書画骨董雜誌』九七）にいう、

此間徂徠詩集ちらと一覽仕候。誤字は勿論平仄違の詩数多見え、仄字を平に用ゐられ候も見え申候。世上へ出して氣の毒に存候。あれにても好き事に候哉。南郭何と存ぜられしや。乍序つぶやき申進め候。

言ひ分は春台の方に理があろう。いくら書肆に督促されたとはいえ序文のない詩集を刊行したのは、徂徠ほどの大家の集としておよそありうべからざる非常識のことであるし、忽々に冠した序が猶蘭ひとりというのではいかにも淋しい。幕閣の重役や南郭自身・春台・周南等の高弟数名が序跋を連ねて当然であった。校合の疎漏については山本北山の『作詩志叢』附録に数箇所が指摘されている。また詩文の配列が必ずしも成稿の順序に従っておらず、徂徠の伝記を知ろうとする後代の学生の恨みをかう。『芙蓉館帖』第七卷に収める徂徠の南郭宛て漢牘三通のうち二通は『徂徠集』に収録されていない。自分宛ての書翰でさえこの通りであるから、『徂徠集』編纂についての南郭の誠実さは、疑われても致し方のないものであった。「南郭ハ……人ニカマハズ我が物ズキヲ立テラレシ人ナリト子式（蘭亭）ノ評ナリ」（『文会雜記』一上）、自分ひとりの世界を構築して中に閉じこもろうとする南郭の性向には、先師の文集を立派に仕上げるといった現実社会の約束事を、わずらわしい、あるいはどうでもよいことと意識してしまう一面があったのであろうか。

○この年春の五律一首を掲げる。

惜花

風花看可惜

杯酒転相親

傍舞憐如雪

随歌奈逐塵

留期良夜宴

行値幾時春

縦有<sub>二</sub>明年色<sub>一</sub> 堪<sub>レ</sub>争<sub>二</sub>白髮新<sub>一</sub>（三・二）

○同じ春、維良（二十七歳）・維恭（十四歳）の二兄と松下烏石を携えて江島に遊んだ。「報<sub>二</sub>猗蘭侯<sub>一</sub>。其一」（三・一〇）は、心ゆくまでの解放感を味わい、童心に帰って戯れたさまを告げて躍如とする。

偶々また漫興一首を得。……乃ち陷<sub>あな</sub>に就いて研<sub>すより</sub>と為し、海水を滴<sub>しやく</sub>と為し、数升の墨を磨し、筆を染むること飽満、狂走して一掃す。字間乱斜、且つ数十歩に及ぶ。烏石傍より絶叫して快と称す。

注意すべきは、その後

吾が党の知己、多く已に寥落す。願<sub>おも</sub>ふに君侯の俯して一笑を賜ふにあらずんば、誰か与に此の狂態を語るべき者ぞ。

とあることである。彼らの性情の解放には「吾が党」——擬似的な自由を保証し合う文人同士の交遊——が必要であることを、南郭みずから語るものであった。I六八頁参照。

なお文中に「凡そ三たび其の地に渉る」というが、同じ時に詠じた五律を「再遊<sub>二</sub>絵島<sub>一</sub>。留<sub>二</sub>別諸君<sub>一</sub>」（三・二）と題するし、享保十四年の江島行以来、この元文二年まで江島行の詩文は文集に見当らないから、「三たび」は誤りであらう。

○やはり春、古稀を迎えた撰津池田の田中桐江に七律「池田富春山人七十初度。寄<sub>レ</sub>賀」（二・四）を贈った。桐江は五年後の寛保二年に歿する。

○秋、磐城守山藩の家老岡田兼山に詩を寄せた。

酬<sub>二</sub>田彦愛見<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>懷

憔悴懸思旧楚臣 閑居海畔卜<sub>二</sub>誰隣<sub>一</sub>

釣漁日近扶桑樹

書札鴻遙碣石浜

愧我開<sub>レ</sub>緘驚<sub>三</sub>歲月<sub>一</sub>

憐君託<sub>レ</sub>酒避<sub>二</sub>風塵<sub>一</sub>

比來欲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>滄浪水<sub>一</sub>

無<sub>レ</sub>恙狂歌寄<sub>二</sub>此身<sub>一</sub> (三・三)

兼山、名は宜汎、彦愛は字。このころ讒言に遭つて貶黜され、常州松川に蟄居した。南郭は平野金華を介するなどして友誼を結んでいたのであろう、失意の兼山を慰めるため、右の外多くの詩を寄せ、数度の書翰を贈り、熱い友情を披瀝した。I二三頁参照。あたかも兼山の逆境に柳沢家致仕前後の自己の境遇を想起したかのごとくである。兼山の蟄居は七年後の延享元年に許された。のち南郭は寛延三年に歿した兼山のため「守山大夫岡田君墓碑」(四・八)を撰する。

○この年秋から、五律「桂花樓翫<sub>レ</sub>月。得<sub>二</sub>棲字<sub>一</sub>」(三・二)等、桂花樓で詠じた詩が見え始める。本多猗蘭が邸内に営んだ樓閣で、ここで詩会が頻繁に催される。

○九月、『南郭先生文集』二編を嵩山房から刊行した。享保九年ごろから元文元年(一部は二年)までの詩文を収める。松下烏石の輯校、本多猗蘭が跋を与える。

○冬、七律「歲杪。飲<sub>二</sub>余子綽<sub>一</sub>。邂<sub>二</sub>逅東伯通<sub>一</sub>」(三・三)がある。余子綽は大内熊耳。徂徠門下。その先が百済の王族から出たとして余氏を称する。名は承祐、子綽は字。唐津藩儒。『南郭先生文集』に初めて登場した。論客で、『熊耳先生文集』には議論の文が多い。徂徠直門の生き残りとして宇佐美瀧水とともに春台・南郭歿後の護園を支えた。詩題に見える東伯通は東城雲華。岡崎藩医で早くから護園諸子と親しく交わった。南郭に「雲華東城先生墓碣」(四・八)がある。

○十二月、太宰春台の『詩書古伝』に序を与えた(「詩書古伝序」、三・五)。春台から『徂徠集』に序のないことを責

める「与子遷書。其四」を受け取ったのもこのころで、『護園録稿』論争以来気まずさはのっぴきならないところまで来ていたであろうが、序を求める方も与える方も、兄弟弟子としての儀礼を欠くわけにはいかない世間体があった。『詩書古伝』は春台が論語・左伝以下先秦秦漢の古書から詩書に言及した部分を抜粋編集した大部の書物で、成稿はこの年であるが、春台歿後の宝暦七年に刊行された。

○この年、「送田大心序」（三・五）を撰した。Ⅲ二一六頁参照。南郭の隠遁志向・怠惰志向は、これまでも入江若水や田中桐江の自在の境涯を羨やむなど、折に触れて漏らされてきたが、それが老荘思想への傾斜という積極的な形で初めて示された点において、本篇は後の「寐隠弁」（四・六）と並んで、老境に入った南郭の思想をうかがう上で重要な資料となる。田大心は本名上田平蔵、医師で山城淀の人という以外、履歴を詳らかにしない（『文会雜記』二上）。護園の政治思想には老荘を治術の手段として評価する考え方があり、そのためこのころから護園の学統を引く人々の手によって老荘のテキスト・注釈書の刊行が盛んになされた事情は、中野三敏氏「談義本研究（一）」（『国文学研究』第三集）に詳しい。南郭もテキストとして『郭注莊子』（元文四年刊）『莊子音義』（寛保元年刊）を校刊した。もっとも南郭の老荘への傾斜は、政治思想とは無縁の、「送田大心序」に

また吾が好む所に従はん。……庶幾はくは、以て其の情性を暢舒するに足らんことを。

というがごとき、己れ一個の解放を欲する隠遁志向であった。

元文三年 五十六歳

○正月、「飛鳥山碑帖序」（三・五）を撰した。「飛鳥山碑」は幕命により成島道筑が撰文し、前年冬飛鳥山に建てられた。建碑の次第は道筑の曾孫東岳の『飛鳥山碑始末』に詳しい。南郭の序は王子金輪寺で碑文の拓本数十部を特製したのに添えられたもので、この序の部分だけはおそらく版刻されたのであろうが、実物は管見に入らない。

○春、「白華印譜序」(三・五)を撰した。『白華印譜』は忍海の印譜で、稀観の書である。忍海、号は海雲。増上寺宝松院第九世。この年四十三歳。南郭と厚く交わった。三村清三郎氏に「忍海上人」(『近世能書伝』所収)がある。現在服部元義氏の蔵される南郭の遺印のうち、「優哉游哉聊以卒歳」(『左伝』襄公二十一年に引く逸詩)と刻するものがある。太平の逸民の気分を歌うこの印文を刻したのは恐らく忍海であろうと、服部匡延氏「南郭印存」(『早稲田大学図書館紀要』第二二号)に考証する。また同じく服部元義氏蔵の南郭の肖像画(Ⅱ一五二頁参照)の両者を、服部家では忍海と伝えている。

○四月ごろ、増上寺の定月和尚が賀茂真淵に入門した。『県居門人録』で、元文三年四月入門の長谷川謙益の次に定月の名が見える(入門時期未詳)ので、しばらくここにかける。

妙普定月はのち宝暦六年に増上寺四十六世となる浄土宗の高僧で、この年五十一歳。南郭と親しかった。『三縁山志』一〇「列祖高德」の定月の項に、

鴻儒南郭服子、久しく高致に帰し、時々来社敬崇す。孝子仲英、其の母(南郭の妻久米子)をともし、日課称名を受けしむ。

と。寛保二年、定月が小金井東漸寺の住職となった時、南郭は七律「定月上人住ニ小金東漸寺。賦レ此奉レ送」(三・三)を贈っている。

南郭が賀茂真淵と親しく交わったと清水浜臣の『泊泊筆話』に述べ、真淵が南郭の『唐詩選』講釈を聴問した際のエピソードを『近世畸人伝』や『胆大小心録』に伝えるのであるが、南郭・真淵の交渉を証明する直接の資料はまだ管見に入らない。定月が南郭と真淵を結びつけたとはいわないが、双方にゆかりのある人物がこのように存在したという例として、ここに挙げた。

○八月、鎌倉光明寺の住職称譽真察が智恩院第六十世に任ぜられ、京都へ発った。真察が増上寺にいた時から友宜を結んでいた南郭は、「送<sub>二</sub>大僧正智恩察公<sub>一</sub>序」（三・五）七律「送<sub>二</sub>大僧正察公還<sub>二</sub>華頂山<sub>一</sub>」（三・三）等を贈った。

元文四年 五十七歳

○正月七日、万庵が歿した。五律「弔<sub>二</sub>芙蓉万公旧居<sub>一</sub>」二首」（三・二）がある。

○五月、「新刻蒙求序」（三・五）を撰した。『蒙求』の、俗書として軽んずべからざることを説く。この序を冠した新刻蒙求は寛保元年三月、京都榎井藤右衛門・江戸植村藤三郎から刊行された。右の序に二男維恭がこれを校訂したと述べるが、版本の奥付には「東都南郭先生考訂」とある。

○同じく五月、南郭校の『郭注莊子』が京都中野宗左衛門・江戸植村藤三郎から刊行された。巻頭に南郭の「読<sub>二</sub>郭注莊子<sub>一</sub>」（三・九）を置き、郭注をもって莊子の真を得たものと述べる。このテキストに千葉芸園が再校を加えた天明三年刊本が普通行われている。

なお南郭は郭注について、

郭象ハ中々コレニテ句ゴトニ解スルト云ヤウナル下等ノ心ニアラズ。ヤハリ莊子ヲツカマヘテ清言スル心ナリ。  
〔文会雜記〕一上）

との言も残している。

○夏、「題<sub>二</sub>爽鳩遺詩<sub>一</sub>」（三・九）を撰して鷹見爽鳩の未亡人に与えた。爽鳩、名は正長、字は子方。三河田原藩士。早くからの徂徠門下であるが、詩文の稿を多くは残さなかったので、事蹟があまり知られない。享保二十年歿。未亡人が遺詩を収集して編んだ『爽鳩詩稿』（大本一冊）は、右の南郭の題言を冠して宝暦五年に刊行された。

○夏、五律「飲<sub>二</sub>水大夫館舍<sub>一</sub>。得<sub>二</sub>東字<sub>一</sub>」（三・二）がある。水大夫は水野華陰。名は元明、字は明卿。出羽莊内藩の

家老で、同家中の匹田九臯とともに『徂徠先生答問書』の「問」を發した人物である。太宰春台と特に親しく、その日記『台伸録』には春台を始めとする護園諸子との交渉が書きとどめられている（国分剛二「太宰春台と水野元朗の『台伸録』」(一)〔三〕、『東洋文化』第一三五～一三七号)。寛延元年に歿し、南郭は「大泉大夫水野君墓碑」(四・八)を撰した。○九月九月、品川の東海寺少林院に遊んだ。七絶「九日同登少林院上方。得十二侵」(三・四)がある。

緑酒黄花傍少林 相携此日愛登臨

虎溪転作亀山会 忘却風雲醉後心

前年元文三年秋に七絶「遊東海寺少林院。和大川尊者作」(三・四)があつて、東海寺との交渉がこのころから開けた。大川義凌は『南郭先生文集』では初め少林院の、後に妙解院の住持として登場する。東海寺は昔日の規模なく、両院とも減んでいるので事情を詳らかにしない。のち大川は京都大徳寺三百五十七世に任ぜられる。

東海寺少林院はやがて南郭に先立って歿する二男児と南郭自身の墓所となる地で、南郭はしばしばここに遊んだ。早大図書館服部文庫に、『少林帖』と題する半紙本九丁の写本が蔵される。南郭を中心に催された少林院での詩会の詠を収めるが、南郭の作が右に掲げた七絶であるので、元文四年九月九日の会の記録であると知られる。南郭以外の出席者を原本の表記のまま挙げる。

高惟馨 高羽 林有之 田穀卿 積曇海 積忍海 服惟良 島玄仙 李成庸 晁泰亮 熊元朗 衲子元鬯 服惟  
恭 鶴孟一 松保広 荘允益 源敏樹 積曇津

このころの南郭が最も親しく交わった友人門下なのであろうが、未詳の人々が多い。高惟馨は高野蘭亭。高羽は既出の高翼之。田穀卿は八田玉山、字は有道。筑前福岡藩医。曇海は本多猶蘭の菩提寺である深川の浄土宗靈巖寺の十七世。このころはまだ増上寺にいたか。忍海は既出の増上寺宝松院九世。服惟良は南郭の長男。晁泰亮は河内狭山藩

儒朝比奈南山、字は君采。徂徠門下。熊元朗は宇土藩医熊本自庵、字は華玉。南郭門下で、『南郭先生文集』三編を校する。服維恭は南郭の二男。鵜五一は幕臣鵜殿左膳、字は子寧。妹よの子は賀茂真淵門下の女流歌人。家系は丸山季夫氏「村尾家系譜」鵜殿士寧・余野子・村尾正靖「（ぐんしよ）昭和三十九年八月号」に紹介される。南郭門下のうち安達清河と並んで詩名高い。この年三十歳。松保広は旗本松前保広。のち端広まきひろと改名した。『南郭先生文集』には元文元年から登場して、南郭はこの人の屋敷でしばしば詩会を催した。すなわち文集に松前公、あるいは屋敷が霞ヶ関にあったか、霞関公として見える人物である。荘允益は既出の荘田豊城。源敏樹は篠山藩士辻弥藤次、字は稷卿。護園諸子、特に蘭亭と親しかった。爾余の人々については未詳である。

『手紙雑誌』第五卷第一号（明治四十年八月）に写真版の掲出される南郭の書翰は、年次不明であるが、少林院の詩会のことを報じてあるのでここに掲げる。

春色御平安候乎。兼而御約束申上置候少林院之会、弥明日相催候積に御座候。御手透にも候はゞ、御同道申上度候。此方よりは外に同行も無<sub>レ</sub>之、山人斗に御座候。あの方には四五輩来集も可<sub>レ</sub>有哉。朝四ッ時過草堂え御むけ御枉駕待入候。頓首

二月三日

元喬

屋代与左衛門様

宛名の屋代与左衛門は松下烏石門下の書家源師道、号は竜岡。すると右の文中の山人とは烏石山人のことであろう。○九月十四日、春台が六十歳の誕辰を迎えた。南郭は初めこのことを知らず、その日を過ぎてから七律「春台兄六十初度。門人共觴紫芝園社。過<sub>レ</sub>時間<sub>レ</sub>之。寄<sub>レ</sub>以為<sub>レ</sub>寿」（三・三）を贈った。詩中、「期に後れて只恨む良会を過せしことを」と。

○九月、徂徠門下の尾張藩儒木下蘭阜の詩集『玉壺詩稿』が刊行された。蘭阜の門人木村嶺南の編纂した『玉壺詩稿附録』が附されており、これは時人の詩を広い範囲にわたって収集した総集なのであるが（I七〇頁参照）、面妖なことに南郭の作は一首も採られていない。

○冬、門人中西仲英が親を帰省するため江戸を去った。莊田豊城の送別詩（享保十八年の項、一五一頁参照）のほか、南郭に五律「送<sub>三</sub>仲英<sub>三</sub>省畿南<sub>二</sub>」（三・二）、高野蘭亭に五律「冬日送<sub>三</sub>西仲英<sub>三</sub>還<sub>レ</sub>郷省<sub>二</sub>觀<sub>二</sub>」（『蘭亭先生詩集』五）の送別詩がある。

送<sub>三</sub>仲英<sub>三</sub>歸<sub>三</sub>省畿南<sub>二</sub>

風厲歲云暮

促<sub>レ</sub>歸遊子心

故山南木在

臘酒北堂深

父老欣<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>恙

田園自可<sub>レ</sub>尋

一經將<sub>三</sub>爾業<sub>二</sub>

持贈賸千金

仲英が江戸へ戻った年は未詳である。

○この元文四年のころから掃塵会が始まった。掃塵会については『増一話一言』二に記事がある。

南郭先生、毎年十二月十三日には家内の煤払をさけて東海寺少林寺にて詩会をなす。名づけて掃塵会といへりと、耆山和尚の物語なり。

増上寺の忍海の南郭追悼の歌文が『芙蓉館帖』第五巻に収められていて、いう、

服夫子、年毎のすゝおさめの日は予が許におはしてちりをさけられしを、いつしか掃塵会と称して従游の諸君の問ひ集りてものせしもほとと二十余年也。ことし夏の終、夫子世を去り玉ひぬれば今日の会も絶えて寥々たる

に、□月のぼる比はいつも帰り玉ふなど思ひ出ぬれば感深く侍りて、口ずきみぬるをかひつけて牌前に供す。時に己卯の臘十三日の夕也。

海雲

今ははた浮世の塵をはらひはてころの月や空にすむらむ

海雲は忍海の号。己卯は宝暦九年、その二十年前の元文四年にしばらくかける。右によれば、掃塵会は増上寺の忍海の許で行なわれたとするのが正しい。

元文五年 五十八歳

○三月十一日、二男惟恭、字は愿卿、通称辰三郎が歿した。享年十七。東海寺少林寺に葬った。享保十五年に母を葬った時までは日蓮宗であった南郭が、臨済宗に宗旨変えした事情は明らかでない。

惟恭はよく父の性をうけ、「八九歳、未だ教習に就かざるに即已すでに自ら簡冊を取りて之を読み、一たび読めば忘れず」（識愿卿墓石）、三・八）という非凡の秀才で、南郭のかけた期待は大きかった。その子に先立たれた悲嘆ははなはだしく、五律「悼兒恭。四首」（三・二）「識愿卿墓石」「祭兒恭二文」（三・九）を著わして、哀戚の情を痛々しいばかりに述べる。

悼兒恭。四首。其二

不知花日過 零落已蕭然

双淚春風後 孤雲夜月前

明珠從汝失 老蚌有誰憐

空手悲吾道 何依送暮年

なお維恭と松下烏石についての逸話が『葦園雑話』に伝えられる。

恩卿ハ<sup>辰三</sup>美童也。烏石ガ竜陽君ニテ、旅行或ハ青楼ナドヘモツレ行タリ。夫レヲ南郭ハ唯カワユガルトノミ思ハレタレドモ、モトハ此ノ訳ニテ、夫ヨリ養生モ宜シカラズトヤアリタルト見ヘタリト、伯玄云ヒキ。伯玄は未詳。

○夏、「題『芦隱稿首』」(三・九)を撰した。Ⅲ二一九頁参照。『芦隱稿』は近藤芦隱の詩文集。稀観の書であるが、中野三敏氏の藏本によって一見するを得た。大本一冊。南郭の題を冠してこの年十一月、江戸西村源六・京都西村市郎右衛門から刊行された。芦隱、名は舜政、字は淳民。当時西の丸表右筆で、寛保三年御書物奉行に任ぜられた。老荘学者で、『老子本義』(享保十六年刊)『老子答問書』(元文五年刊)の著がある。南郭は右の文章で、芦隱が幕臣でありながら経済に志を絶ち、「吏隱」をもって自ら居ることに好感をよせている。

寛延年間の作と推定される五律「初夏題『吏隱亭』二首」(四・一)も、おそらくは芦隱に贈ったものである。其の一、

野興多<sup>三</sup>官暇<sup>二</sup>

邱村占<sup>二</sup>艸堂<sup>一</sup>

残花春未<sup>レ</sup>尽

新樹日添<sup>レ</sup>長

留<sup>レ</sup>客開<sup>二</sup>幽境<sup>一</sup>

銜<sup>レ</sup>杯即時醉

主人真<sup>レ</sup>隱趣

朝市兩相忘

○この年、「豊曰杵大禹后稷合祀碑銘」(三・八)を撰した。これは門人莊田豊城の主君曰杵侯稻葉泰通が領国松崎に農業の繁栄を祈って禹稷合祀の壇を築き、南郭が依頼されて碑文を撰したものである。豊城の『富嶽図記』(一七三頁参照)の巻末に附載された、建碑をめぐる文章数篇に事情は詳しい。南郭の碑銘もそこに収められ、それによって

書が松下烏石であると知られる。

寛保元年 五十九歳

○三月、二男維恭の遺稿集『鍾情集』が植村藤三郎から刊行された。大本一冊。熊本白庵序。巻頭に南郭の維恭追悼の文二首・詩四首を置く。維恭の遺詩は九十五首。確かに松下烏石との贈答の作が多く、前掲『護園雜話』の所伝を裏付ける。巻末に諸家の「吊哭詩」を附する。原本の表記のままその人々を掲げると、

高翼之 雲夢先生 越叔岳 山文卿 源稷卿 鶴士寧 田有道 井勃卿 高子式 谷山公子 源君嶽 西仲英  
莊子謙 熊元朗

何人かは前掲『少林帖』と共通する。越叔岳は越智雲夢の息で名は正山、号は桃源。井勃卿は臼杵藩士であることのみ知られる。『豊城詩集』の校者であるから、同家中の莊田豊城を介して南郭の知遇を得ていたものか。山文卿・谷山公子は未詳。

○同じ三月、維恭校訂という『新刻蒙求』が刊行された(元文四年五月の項、一六五頁参照)。  
○夏、玉川に遊んだ。

夏日遊玉川。五首、其二

城郭西河水 尋源一带長

初疑到銀漢 兼似濯滄浪

境絶塵纓色 波揚彩石光

古歌伝調布 白紵麗如霜 (三・二)

○八月十五日、七律「中秋独酌」(三・三)を詠じた。Ⅱ一七三頁参照。

○十月、「江陵集序」(三・五)を撰した。万庵が生前ほとんどの詩稿をみずから火中に投じたので、松下烏石の編纂したこの約五百篇しか作品が残されていないと述べる。万庵の詩集『江陵集』は、巻頭に右の南郭の序と徂徠の跋(真跡模刻、『徂徠集』一八)、巻末に南郭の七古「讀三万公終期詩」、詠嘆作歌示三烏石山人」(三・一)を置いて、延享二年に刊行された。

寛保二年 六十歳

○春、森元町(現港区東麻布二丁目)に移居した。『増一話一言』一六に、

つるに赤羽中の橋の北、御披官何某の地をかりて住めり。

と。享保十五年冬以来同じ赤羽に住んでいたのであるから、すぐ近所への移居であった。この年裁した山県周南宛ての「報次公」(三・一〇)に、

去歳乃ち草廬を更め造ること有り。以て今春に至り、塵事自ら瘳れ、翰墨静好の事に従はざること殆んど半年。

と見えていて、家の造作に取りかかったのは前年寛保元年からであった。『芙蓉館聞書』の、服部匡延氏の翻刻(「服部南郭資料」)には省略されているが、第五丁表に紙片が貼りつけられていて、

当地所御移

此証文下書ハ  
黒牛印籠蓋ノ

(以下破損)

寛保元年辛酉八月

距明治十一年戊寅百三十八年

と記入されているから、これによれば移居は前年八月で、造作の完成したのがこの年春であったとすべきか。以後ここが代々の服部家の居所となる。南郭が騒壇の大家の声望にふさわしい家作りをして大いに満足したことは、次の詩から知られる。

移<sub>レ</sub>居巷北<sub>一</sub>

十載衡門赤水西

移<sub>レ</sub>居仍自傍<sub>二</sub>幽溪<sub>一</sub>

犬鷄不<sub>レ</sub>隔知<sub>二</sub>窮巷<sub>一</sub>

燕雀相隨安<sub>二</sub>旧棲<sub>一</sub>

欲<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>風塵<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>跡

羞栽<sub>二</sub>桃李<sub>一</sub>易<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>蹊

只憑<sub>二</sub>春樹漸遮斷<sub>一</sub>

定似<sub>二</sub>花源使<sub>一</sub>客迷<sub>一</sub> (三・三)

『文会雜記』二上に数奇を凝らした家作りと宏壯とを伝えられる、いわゆる芙蓉館がこの家であった。

芙蓉館ノ講堂ハワラブキニテ、凡ソタ、ミ数ニテ云ヘバ、四五十畳モシカルベシ。板敷ニウスベリヲシキタリ。  
夥<sup>あまた</sup>多人ノアツマルコトナリ。屋敷ノ裏ノ方ニアリ。

またI一一九頁参照。

○春、七古「莊子謙遊<sub>二</sub>芙蓉<sub>一</sub>図帰。同題作<sub>レ</sub>歌」(三・一)を詠じた。翌寛保三年五月刊の莊田豊城の『富嶽図記』は、豊城の富士登山について、豊城自身の「芙蓉之図」「芙蓉記」を初め、右の南郭の七古を含む諸家の詩文を収めた有閑の書物である。「芙蓉記」によれば登山は七月。東方陸なる人物の芙蓉図解説に寛保二年三月、大内熊耳の「題<sub>二</sub>莊子謙芙蓉図卷後<sub>一</sub>」に寛保二年春の年月付けがそれぞれあるから、豊城の登山は寛保元年七月、南郭の七古は右の二年と同じく二年春と、しばらく定める。

○夏、「松貞文墨譜跋」(三・九)を撰した。奈良の墨肆古梅園松井元泰編の『古梅園墨譜』(寛保二年跋版)に与えたもので、同書第四冊に松下烏石の書で収まる。『古梅園墨譜』についてはI一二二頁参照。

寛保三年 六十一歳

○正月、小本『唐詩選』が再版された。半紙本『唐詩選』がいつから出現するのか十分には調べていないが、小本よ

りかなり遅れることは確実である。おそらくは小本が普及して『唐詩選』の声価が確立したあとをうけるものであつて、南郭生前には小本しか版行されなかつた。大阪府立図書館蔵『寄宇野明霞諸家墨蹟』に収める南郭の宇野明霞宛て書翰は、この寛保三年版『唐詩選』を明霞に斡旋した事情を伝えている。

拜誦、昨日は御書忝奉<sub>レ</sub>存候。且又唐詩選価三百銭落掌、則句帳為<sub>レ</sub>仕候。以上

圍四月五日

宇三平様

小右衛門（表書）

「句帳」は売掛けの欄から抹消することをいうか。明霞が南郭を通じて『唐詩選』の入手を計つたのは、このころはまだ京都では入手しにくかつたからか。『唐詩選』が版權侵害事件を引起すほどの目ざましい売れ行きを示すのは、後年のことに属する。一七七頁参照。

藤原章の『筑川先生話凡十条』（内閣文庫蔵写本）に、明霞が『唐詩選』の南郭の訓点を改めた話が見えるので、便宜ここに掲げる。

南郭先生ノ唐詩選訓点、大方ハ詩意ニカナヒタレドモ間亦疎ナル処<sub>ニ</sub>ミユ。一二句ヲ拳テ知ラサン。李白ガ清平詩ニ、「解<sub>レ</sub>積<sub>ニ</sub> 春風無<sub>レ</sub>限恨<sub>ト</sub>」ト点セリ。「解<sub>レ</sub>積」ハ聯綿語ナリ。クヅシテヨムハ不可ナルベシ。又張謂ガ詩ニ、「世人結<sub>ニ</sub>交<sub>ニ</sub> 須<sub>ニ</sub>黄金<sub>ト</sub>」、張籍ガ詩ニ、「無<sub>レ</sub>人解<sub>レ</sub>道<sub>ニ</sub> 取<sub>レ</sub>涼州<sub>ト</sub>」、如<sub>レ</sub>此ノ点セリ。「須<sub>レ</sub>黄金<sub>ト</sub>」、「無<sub>レ</sub>人解<sub>レ</sub>道<sub>ニ</sub> 取<sub>レ</sub>涼州<sub>ト</sub>」、是ナレバ作者ノ意ナルベケン。近來京師ノ字士新、改点出セリ。詳カニ尽セリト思ハル。

明霞の改点本とはどのような書物であろうか。右によれば藤原章は実見したかのごとき口ぶりであるが、思いあたるところがない。

○この年の夏か、箱根に遊んだ。七古「早雲寺覽古」(三・一)七律「遊<sub>ニ</sub>玉筍山<sub>ト</sub>」六首(三・三)がある。この年の

ことを推定されるが、三・一の詩の配列で「早雲寺覽古」の前後に不審な点があって、確言はできない。

延享元年 六十二歳

○春、中西仲英を同行して鹿島に遊んだ。旅中吟数篇を残すが、潮来節を漢訳した竹枝詞「潮来詞二十首」（三・一）が最も注目される。

其三

門前倚<sub>レ</sub>独樹<sub>一</sub>

鬱鬱掩<sub>レ</sub>江涯<sub>一</sub>

為<sub>レ</sub>是苦心多<sub>一</sub>

春来不<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>花

其十六

大堤数株柳

不<sub>レ</sub>繫<sub>レ</sub>歎舟婦<sub>一</sub>

空余<sub>レ</sub>惱<sub>レ</sub>人色<sub>一</sub>

不<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>儂依々<sub>一</sub>

艶詩を愛好するのは古文辞派の詩風の顕著な特徴であったが、ここで南郭の行なった俗謡の漢訳はそれをさらに一歩進めた試みで、文人文学の俗意俗情への傾斜の突破口を開く意味があった。宝曆から明和・安永へと追隨作が陸續と登場し、門人安達清河には題も同じ「潮来詞二十曲」（『市隱草堂集』前編一）がある。I九四頁参照。南郭としては、恋の情緒への憧憬を遊戯の気分の中に解放する手すさびであった。

同趣の彼の手すさび幾つかを、便宜ここに掲げておく。『唐詩選』六に収められる郭振の「子夜春歌」、

陌頭楊柳枝

已被<sub>レ</sub>春風吹<sub>一</sub>

妾心正斷絶

君懷那得<sub>レ</sub>知

これを俗謡調に訳した唄が、詞章を少しずつ違えて柳沢洪園・岡白駒等の名で伝えられているが、『甲子夜話』一九

で南郭の作とされているものを引く。

道のほとりの青柳を      あれ春風が吹くわいな

わしが心のやるせなさ      思ふとのごに知らせたや

菅原重厚の『匂双紙』(天明六年刊)に、珍らしくも南郭の発句が見えている。

吉原の門に五尺の菖蒲かな      南郭先生

『仮名世説』に載せる次の逸話、赤羽先生は服部仲英であるかも知れないが、なお南郭であろう。

香山和尚の物語に、赤羽先生、門下の諸生のあつまりてかたるをきけば、狂詩をつくるといふ。何の題ぞと問へば、夜発を詠ずといふ。先生微笑して、「二十四文明月夜」と朗吟して過ぎられしとぞ。

杜枚の七絶「寄揚州韓緯判官」中の「二十四橋明月夜」をもじり、夜鷹の値段二十四文をかける。

○夏、七律「夏日閑居。八首」(三・三)がある。其の五を掲げる。

夏日清風臥草堂      無端牽睡到羲皇

思女昔夢崑崙上      遺世還遊華胥鄉

窓下寤來仍撫枕      庭陰浴罷更移牀

暑天不厭昏時促      回首園林已夕陽

延享二年      六十三歳

○春から夏にかけて、上方へ旅行した。山県周南に与えた「報泉次公」(四・九)は、五月に太宰春台が死去した旨報じていて、延享四年に裁されたものである。その文中、「弟、往年西土に謾遊す」という。往年とは延享二年と三年のいずれを指すのか。右の書牘にも「比年以来、漸く文辞の業の養痾に害有ることを悟る。……故を以て益々復た

著作を棄絶し、一字の人に応ぜざること、今且つ三年」とある通り、このころの南郭は詩文の制作を極端に控えており、『南郭先生文集』四編で詩の各体の最初の方に配列されている延享年間の作品のうち、年次を確定できるものが見当たらないので、各体の冒頭に置かれた旅中吟の位置から、旅行の二年であるか三年であるかを決定することはできない。三年の旅行であるなら、四年の周南宛て書牘で、「往年」といっても差支えはないが、やはりそれよりは「前年・昨年」等と表現するであろうことを根拠に、しばらく二年と定める。元禄九年十四歳で京都を出て以来、実に四十九年ぶりの帰郷であった。

帰郷の目的が何であったのかは知られない。亡父元矩の五十年忌が前年延享元年であるから、それとかかわりがあるか。ただし元矩の位牌のある京都妙覚寺玉泉院には南郭の来訪を語る資料は残されていない。因みにこの位牌は、裏面に、

嗚乎歲月悠久恐祭祀湮滅焉聊捐資再造之永世以追福矣……享和癸亥七月下旬曾孫服元立誌

と記入されていて、享和三年南郭の孫仲山が納めたものであるから、玉泉院と江戸の服部家とのつながりは後々まで続いている。後掲秋元澹園宛ての南郭の書翰には、「畿内辺、名山川等略々歴覽仕度存意」とのみいう。旅中吟より京都から吉野・初瀬・箕面まで足を伸ばしたことが知られ、確かに遊覧の気味の濃い帰郷であった。

早稲田大学図書館に蔵する南郭の秋元澹園宛て書翰は、この旅行のことを報じたものである。服部匡延氏「服部南郭資料」中の翻刻を全文転載する。

三月十二日辱翰致<sub>レ</sub>拜見候。先以御平安御動被<sub>レ</sub>成、珍重奉<sub>レ</sub>存候。誠前年は御事繁内、御過訪辱次第奉<sub>レ</sub>存候。久々にて得<sub>レ</sub>貴慮、大悦不<sub>レ</sub>過候。<sub>(マツ)</sub>乍<sub>レ</sub>然忽卒之間、遺憾是耳御座候。且又拙者今年西游之奉御聞及被<sub>レ</sub>成候由、御心被<sub>レ</sub>懸、通路立寄候様被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>、御厚情千万辱奉<sub>レ</sub>存候。従来は不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>候共罷過候候節は立寄、得<sub>レ</sub>貴慮一度本意

(疾脱カ)

に処、此度西游、日少、畿内辺名山川等略々歴覽仕度存意に付、兼て同伴申合、往來之道筋及京大阪等随分避候て、密過仕候覺悟にて罷出候に付、道中京大阪共に相識之方皆々沙汰なしに罷過候躰、依之御城下昼日相過候節も、存出ながら空過仕、遺憾之次第奉存候。三月中上路、四月は洛外山川・大和摂河之際略行仕、五月二日発行、同十六日從木曾路無恙東帰、今程無事致し休息候。くれぐれ御心懸御御細書御指示被仰下し、忝奉存候。帰後発封拜見、稽報至今候。右御謝礼迄、御答報旁如、此御座候。恐惶謹言

服部小右衛門

六月十五日

元喬拜

秋本紀内様

澹園はごく早くからの徂徠門下で、この旅行の道筋にあたる岡崎藩に仕えていた。「相識之方皆々沙汰なしに罷過候」といのは、詩文の唱酬をわずらわしく思ったものか、言葉通りに実行したようで、箕面まで赴いておりながら、すでに面識のある荒木蘭皐等、田中桐江ゆかりの池田の人々と交歓した形跡はない。

高野蘭亭に送別の詩(『蘭亭先生詩集』五)あって、いう、

送子遷携江士瑤西仲英西遊。三首。其二

去矣天涯匹馬輕 鄉閔何処接皇京

風雲尽入西都賦 霄漢重瞻北斗城

三輔樓台春窈窕 五陵冠蓋日縱橫

秦中自是多形勝 誰解文章万古情

すなわち同行したのは江士瑤と中西仲英である。江士瑤は南郭の「江士瑤墓碣」(四・八)によれば、江塚氏、名は

大圭。南郭門下。遠州の人で小田原藩に仕えた。

莊田豊城にも送別の詩（『豊城詩集』五）がある。

送南郭先生西遊。十首。其一

此去青牛不可留 幾年座想帝王州

人間何怪函関外 紫氣只今西向流

其十

幽賞堪尋西野春 嵐山樹影堰河浜

由来此地称招隱 応有清流洗耳人

南郭の旅中吟から三首掲げる。

西遊。賦別諸子

海上年衰且暫回 長安千里路悠哉

久為東泊随流客 非復西征作賦才

朝雨纔過沾旅服 春風欲暮惜離杯

請看遊子浮雲色 廻首天涯去却來

入京有懷

五十年前出上京 今遊猶作客中情

別長何処尋桑梓 祚薄無家問弟兄

認得山川疑夢寐 想來多少自分明

共知流ニ転人寰裏ニ 愧似ニ劉郎返ニ赤城ニ (右二首、四・二)

長安感懷。三首。其一

長安大道昔時春 故苑帰来白髮新

今日看他行樂地 相逢総是少年人 (四・三)

この旅行の折の矚目の景を後に居室の壁に描いたと、『護園雑話』に伝える。

老テ京都ニ遊ビ、帰テ後、居間ノヲシ板ノ壁ノ中央ニ箕尾ノ滝ヲ画シ、左ノ方ニ薩多嶺ヨリ海ヲ眺ムノ景色ヲエガキ、四稿ニノスル七言古詩モ側ニ書テアリ。

「四稿ニノスル七言古詩」については、I三七頁参照。

○五月、小本『唐詩選』の第三版が刊行された。

○十一月、『南郭先生文集』三編が嵩山房から刊行された。熊本自庵輯校。元文元・二年から延享元年までの詩文を収める。『護園雑話』から逸話を一条引く。

南郭ノ三稿ハ熊元朗熊元自庵ノ世話也。一日、元朗ノ宅ヘ校合ニ瀧水・熊耳・土寧・仲英ナド行タリ。其日ハ殊ノ外

酒ガ長ジテ、大杯ヲ求ル故、螺金ノ九合五勺入ヲ維公ノ宅ヨリ持来タリ。大酔ノ上ユヘ誰モ飲者ナカリシ。瀧水

バカリ一盃飲テ、熊耳半分、土寧七分目程ノミタルニ、皆酩酊ニテ倒タルヲ、子廸(瀧水)ノ抱護セラレタル

ニ、土寧ノ介抱ヲモ子廸セラレナガラ、爾後酒ニ於テハ不佞ニ左袒セラレベシト云シニ、土寧、ナルホド伏スベ

シ。サリナガラ無念ナル事カナト云レン由。土寧ノ語氣ノ由。

延享四年 六十五歳

○五月二十九日、太宰春台が歿した。享年六十八。南郭は「太宰先生墓碑」(四・八)を撰した。一節にいう。

前後見ゆる所の諸侯甚だ多し。未だ嘗て己れを枉げて見ゆることを求めず。進退必ず礼を以てし、貧に安んじ道を楽しんで終に復た仕へず。然れども其の志は則ち曰く、「儒者の学、孔子に折中す。孔子の祖述する所、先王歴聖、政治の道具に存す。之を用ふれば則ち行ふ。如し我を用ふる者有らば、何を以てせんや」と。故にまた未だ嘗て経世の用を忘れず。

ついに相容れなかつたライバルの死は、南郭にどのような感慨をもたらしたのであろうか。

○夏秋の交か、山県周南に宛てた前述の「報県次公」を裁した。春台の死を報じて「痛惜の情、乃ち足下の異ならざるを知る」と述べたあと、前引の部分を含んでいう。

比年以来、漸く文辞の業の養痾に害有ることを悟る。是れ唯不才にして思を構ふ、心を焦して強ひて攻せざることを得ず。痾の益々深き、職として此に由るのみ。日々に萎し、月々に衰へ、自然に老いに至るは与からず。故を以て益々復た著作を絶棄し、一字の人に応ぜざること、今且つ三年、即ち旧痾稍々少しく佳なるを覚ゆ。

芸苑の泰斗としての声望が定着するとともに、諸方からの詩文の唱酬や撰文の依頼が輻湊する。それは病弱と相いまって中年以後の南郭をかなり苦しめ、疲労させたらしい。右に三年筆を絶つたといひ、確かに延享二、三年の詩文の作が多くは残されていないことから知られるように、このころからの南郭には可能な限り文雅の交わりを狭めようとする意志が見てとれる。Ⅱ一七七頁参照。

○秋、郡山侯柳沢信鴻に招かれた。

題「郡山侯邸伴月楼」

白壁争投有「衆賓」

武昌秋興夜愈新

只言对「月塘」为「伴」

且想登「楼更待」人

遙映<sub>二</sub>海珠<sub>一</sub>懸<sub>二</sub>邸樹<sub>一</sub> 斜含<sub>二</sub>獄雪<sub>一</sub>藹<sub>二</sub>城園<sub>一</sub>

誰憐不<sub>レ</sub>淺叨<sub>レ</sub>恩客 曾厠<sub>二</sub>当年席上珍<sub>一</sub> (四・二)

郡山藩(享保九年甲斐から転封)では前々年延享二年に藩主柳沢吉里が歿して、その子信鴻が襲封していた。信鴻、号は香山、文事に関心が深く、最も俳諧を好んだがもとより漢詩も嗜んだ。柳沢家とは二十九年前の享保三年以来気まずい行きがかりのある南郭であるが、彼の文名がここまで揚ってみれば、吉里の亡い今、むしろ信鴻の方で辞を低くしての招聘であつたであらう。南郭にしても四十年の昔の吉保のもとでの歌会を想起して、感慨深いものがあつたに違いない。

寛延元年 六十六歳

○三月二十五日、越智雲夢が歿した。享年六十三。南郭は「故法眼雲夢越公墓碑」(四・八)を撰した。

○三月二十九日、長男惟良、字は温卿が歿した。享年三十八。東海寺に葬る。「温卿墓銘」(四・八)にいう、

幼きより羸弱、婚宦を肯ぜず。父母の家を安んじ、静然として私營することなし。

『鹿門随筆』には「痴なる生付にて役に立ぬ人なり」と伝える。次男惟恭の穎才の陰に隠れた生涯であつた。南郭は老いて二男児に先立たれた。

○おそらくこの年の春の作であらう、七律「金井侯聴潮館春集。得<sub>二</sub>十灰<sub>一</sub>」(四・二)がある。

朱門江館庄<sub>二</sub>蘭台<sub>一</sub> 万里雄風接<sub>レ</sub>海開

午色高懸<sub>二</sub>庭樹<sub>一</sub>豁 潮声迫動<sub>二</sub>苑牆<sub>一</sub>回

紫煙霄近遊仙曲 緑酒春浮坐客杯

共羨龍淵臨<sub>二</sub>積水<sub>一</sub> 隋侯自有<sub>二</sub>得<sub>レ</sub>珠才<sub>一</sub>

金井侯は山形藩主松平乗祐。これが初出である。晩年の南郭は隠遁・懶惰への志向を盛んに洩らしながら、かえって諸侯の詩会に頻繁に招かれる。II一七八頁参照。乗祐は熊本藩主細川重賢とともに最もしきりに南郭を招いた大名である。その三男乗富は『鑑定便覧』では南郭の門人として扱われ、豹隱公子の名でやはりこの頃から文集に登場する。

寛延二年 六十七歳

○春、熊本侯細川重賢およびその儒臣秋山玉山との交遊がはじめて開けた。四・二に、五律「鸞嘯閣集。分得二十一尤。奉和熊本侯作」(I三二頁参照)と「鸞嘯閣席上酬秋文学見贈」が並ぶ。

鸞嘯閣席上酬秋文学見贈

高歛不問ニ夕陽催一 永日春風留客杯

白首唯垂ニ絲髮短一 朱門謾醉綺筵開

聴レ歌海表知ニ齊大一 接レ坐蘭台見ニ楚才一

誰謂相求函谷鳥 羞從鸞嘯一徘徊

重賢、この年三十二歳。南郭を篤く敬つたさまは『銀台遺事』によって見るのが普通であるが、ここでは『遺集』（九州大学附属図書館蔵、写大本一冊）を引く。これは熊本藩士安枝正亮が重賢の事蹟を記録した書で、文政七年九月の正亮の奥書がある。

一南郭先生は御大名様方かなたこなたより御招にて上り被中候が、或時公の御湯殿のざつとあるを見て、小身の方の湯殿もかほどには鹿末には無之とて、殊の外被致感心候由、仲和子話也。

一江戸にて白金邸え被為入候節、御用人溝口三伍殿え、其方は学問はせぬそうな、博奕と学問は仕懸りては止ら

れぬものと南郭のいはれたはよきあたりぞと、被<sub>レ</sub>遊<sub>ニ</sub>御意<sub>一</sub>候由、築山氏より伝聞せりと佐藤子話。

玉山、名は儀、字は子羽。この年四十八歳。林家に学んだ朱子学者であるが、豊かな詩才に恵まれ、南郭は歿するまでの十年間親しく交わった。なお熊本藩中老で詩をよくした米田是著、号松洞ともこれ以後交際する。文集に米大夫の名で登場する人物である。

○五月、安藤東野の『東野遺稿』がようやく刊行された。一一六頁参照。

○この年、七律「和<sub>ニ</sub>松崎君修見<sub>レ</sub>贈<sub>一</sub>」(四・二)がある。松崎観海が文集に初めて見えた。観海、名は惟時、字は君修。この年二十五歳。篠山藩士。早くから太宰春台に学んでいたが、春台歿後、このころから南郭の門にしばしば入りする。『文会雜記』には観海を介して伝えられる南郭の言動が多い。その文集『観海先生集』は詩部のみ刊行され、文部は門人熊坂台洲の写した稿本が天理図書館に蔵される。宝暦三年、観海の父で『窓のすさみ』の著者松崎観瀾の歿した時、南郭は「白圭松崎君墓碑」(四・八)を撰した。

○この年、滝鶴台が書を寄せてきた(「南郭先生」其四、『鶴台先生遺稿』八)。その師山県周南が老衰して、昨冬藩校明倫館の祭酒を辞したことを述べ、ついでいう、

聞く、先生近ごろ人間の応酬を絶ち、情を丘壑<sub>に</sub>縦<sub>に</sub>にし、優游して歳を卒ふと。或いは伝ふ、都下の囂塵を厭ひ、丘園を鎌倉<sub>に</sub>賣ると。未だ然否を審かにせず。

このころの南郭は貴顕との応接にいとまなく、人間の応酬を絶つのは強い願望ではあっても実状ではない。鎌倉云々は、高野蘭亭が鎌倉を愛してしばしばその地に遊んだことが誤伝されたのであろう。

宝暦九年七十七歳で歿するまで、南郭の生涯はなお十年を余す。およその見積りで四百字詰原稿用紙四十枚分ほ

どを書き足さなければ、この年譜は完成しない。俗事缺掌、またもや中断のやむなきに至ったことを、ここまで読んで下さった方に深くお詫び申し上げる。